

書物から書物へ

荒魂之會諸會合の三十五年餘

平成二十三年十月
荒魂之會

◇會報あらたまに掲載の記事の再録◇

◇目次◇

甲・荒魂之會三十六年の來歴

狀況の變化に應ずる工夫―あらたま刊行三十五周年の昨今（駒井鐵平）

◇平成二十三年二月刊・第百四十二號◇

道統の顯現を仰ぐひととき―歌會始御儀、正倉院展録畫拜見の記（角山正之）

◇平成二十三年四月刊・第百四十三號◇

荒魂之會二十一年の來歴◇平成八年四月刊・第八十三號◇

◇平成十八年二月刊・第百二十二號◇

荒魂之會二十二年から二十六年迄の來歴◇平成十三年四月刊・第百三號◇

◇平成十八年四月刊・第百二十三號◇

荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴（一）◇平成十八年七月刊・第百二十四號◇

荒魂之會三十二年から三十六年迄の來歴（二）◇平成二十三年二月刊・第百四十二號◇

荒魂之會三十二年から三十六年迄の來歴（三）◇平成二十三年四月刊・第百四十三號◇

荒魂之會三十二年から三十六年迄の來歴（三）◇平成二十三年七月刊・第百四十四號◇

乙・あらたま連歌の會全三十五回詠草一覽

あらたま連歌の會十五回詠草◇平成三年四月刊・第六十三號◇

あらたま連歌の會十六回以後詠草◇平成十三年四月刊・第百三號◇

あらたま連歌の會二十六回以後詠草◇平成十八年四月刊・第百二十三號◇

あらたま連歌の會三十一回以後詠草◇平成二十三年四月刊・第百四十三號◇

あらたま連歌の會全三十五回（昭和五十一年から平成二十三年迄）の出席者一覽

附・あらたま刊行三十年乃回顧の内容……三十六
編輯後記……三十六
題字・加藤征司

會報

會報あらたま

春夏秋冬

状況の變化に應ずる工夫

◇あらたま刊行三十五周年の昨今◇

駒井鐵平

昨年平成二十二年十二月刊のあらたま第七十號はあらたま刊行三十五年記念の號であつた。五十八頁建で七百部である。同人は七名、贊助會員は百三十九名、發足以來三十六年目の同人並に贊助會員の實人數の總數は四百九十五名である。五年前の平成十七年十二月刊のあらたま第六十號は刊行三十年記念號であり、百頁建の千部であつた。この年の同人は十名、贊助會員は百五十名であり、同人並に贊助會員の實人數の總數は四百七十七名であつた。

右の五箇年間は、荒魂之會の現勢の變化のみならず、世の無常も亦、知らされる日々でもあつた。世に知られ、或いは荒魂之會とも縁のあつた各界の施設や刊行物の閉鎖や終刊の報が相次いだのである。

平成十八年・室内(工作社) 歴史と人物
(中央公論新社) 三百人劇場(現代演劇協

昭和天皇御生誕百十周年
平成二十三年・私の漢字教室刊行五十周年
・あらたま刊行三十五周年

平成二十三年二月十日發行第四百一號(年四回刊)
千葉市中央区葛城一丁目三番九號(駒井方)
郵便番號二六〇一〇八五三 荒魂之會

本號四頁

- 荒魂之會三十二年から三十六年迄の來歴(一)……………二
- 例會記・平成二十二年十月から十一月迄……………三
- あらたま第七十號評(四篇)……………四

會、平成二十年・主婦の友(主婦の友社) 現代(講談社) 青森毎日(青森毎日新聞社) 平成二十一年・自由(自由社) 諸君(文藝春秋) 土偶(土偶短歌會) 國文學(學燈社)、平成二十二年・桃(桃の會) 計十件

昭和五十年十月の第一回例會から、平成十七年十二月の例會迄で、荒魂之會の各種の會合は五百五十五回に達し、参加者の延人數は五千四百九十一人、毎回の平均では九・九人であつた。これに續く、平成二十二年十二月の例會迄の五箇年間の各種會合は百四回、参加者の延人數は六百二十一人、毎回の平均では六人である。回顧すれば、これ迄の活動の頂點と目せられる時期は昭和六十三年である。同年七月刊の會員名簿の記載では、同人十二名、贊助會員二百七名であつた。この年のあらたまの刊行は六月刊が第二十五號、十二月刊が第二十六號

御歴代御製

五十いそとせ年の祝ひの年に共に蒔まきし白樺びやうの葉はに暑いそとせき日の射いそとせす

今上陛下(平成二十三年歌會始御儀)

であり、部數は何れも千部であつた。

平成十七年十二月に於る、荒魂之會の各種刊行物は、二百二十點、十六萬五千部であつた。これ以後の五箇年間の刊行物は四十二點、一萬八千九百部であり、これを加へると、荒魂之會三十五年餘の全刊行物は二百六十二點、十八萬三千九百部である。

平成十七年十二月刊のあらたま第四十號・總編輯日本國の研究は刊行二十年記念號であり、百六十六頁建の大冊千部の刊行であつた。今にして思へば、正しく空前絶後の大事業なのであつた。

状況の中で工夫する。状況が變化すればこそ新しい工夫が求められる。常にあらたまの視点を世に示してゆきたい。紙幅の削減といふ條件の下でのこの五箇年間の工夫の三點を言挙げしたい。平成十八年六月刊の第六十一號より、討論記事の中に十二行の紙幅を求め、季語の響欄を設けた。平成十九年十二月刊の第六十四號より、毎年十二月刊の號の目次裏の荒魂之會出版案内の半頁の紙幅を得て、日本書紀寄譯の欄を設けた。そして、各種の資料篇は自家印刷の別刷附録として添へる事にしたのである。

平成二十三年度あらたま刊行豫定

第七十一號(六月刊)總特輯・人間論小論
第七十二號(十二月刊)總特輯・子供の四季

會報あらたま

春夏秋冬

道統の顯現を仰ぐひととき

◇歌會始御儀、正倉院展録畫拜見の記◇

角山正之

荒魂之會では平成十二年以來、二月の例會では「歌會始御儀」の録畫を拜見してゐる。古來、和歌を詠み和歌に親しむ習ひは敷島の道として國民の教養の根幹を成してきた。奈良時代の萬葉集は上代に於るその結實を示す。この風儀は戰國の世でも廢れる事はなかつた。豊臣秀吉は凡そ敷島の道とは無縁のやうに思はれてゐるやうだが、亡くなる半年も前に辭世の句を待女に託してゐたのである。

露と落ち露と消えにし我身かな

浪速のことは夢のまた夢

平成の御代に於ては宮殿松の間で開かれる宮中歌會始である。天皇皇后兩陛下の御前で講師が「年の始めに、同じく、(御題)といふことを仰せ事に依りて、詠める歌」と述べ、獨特の節回しによる披露が始まる。初めは一般から詠進して選ばれた十名の歌の披露である。選者、召人、皇族殿下の御歌、皇后宮御歌と續き、最後は御製が三回繰返して講ぜられる。奥床しく美しい君民

平成二十三年四月十日發行第百四十三號(年四回刊)
千葉市中央區葛城一丁目三番九號(駒井方)
郵便番號 二六〇一〇八五三 荒魂之會

本號四頁

荒魂之會三十二年から三十六年

迄の來歴(一)

あらたま連歌の會第三十一回から

第三十五回迄の詠草

例會記・平成二十二年十二月

和樂の行事がここに展開される。

陛下の御製を拜し、陛下が御定めになられた御題により國民はそれぞれの思ひを和歌にし陛下に差上げる。歌會始御儀の録畫を拜見する度、その道統に連なる喜びを再確認するのである。

平成十五年十一月からは加へて正倉院展録畫を拜見し、定例とした。正倉院の御物は御歴代天皇の敕封によつて守られてきた。しかも、由緒正しい傳世品であり、出土品でも收奪品でもない。不斷は非公開であるが、約九千點を數へる正倉院寶物の中から寶庫の開封にあはせて七十點程が毎年展示される。昨年の第六十二回正倉院展は平城遷都千三百年と光明皇后御遠忌千二百五十年に當るので、正倉院を代表する寶物が數多く出品され、それは見事であつた。

ところで、一昨年九月に「天皇陛下

御歴代御製

波瀾布坂我が立ち見ればかぎろひの燃ゆる家群妻が家のあたり

第十七代 履中天皇

御即位から二十年」と題した映像盤が公立諸學校に送附された事は知られてゐようか。

これは内閣府が企劃したもので、劍璽等承繼の儀、即位後朝見の儀、即位禮正殿の儀、大嘗祭と續く御即位の儀式の紹介から映像盤は始まる。次いで元始祭、歌會始の儀、國會開會式への御臨席、内閣總理大臣及び最高裁判所長官を任命する親任式等の國事行爲の御紹介、賓客を迎へての歡迎式典、晩餐會、行幸啓、被災地への御慰問等々の御紹介が續く。皇后陛下の御養蠶、陛下の鯨の研究により八種類もの新種が発見されたとの紹介も叮嚀である。しかし、何か足りない、一番肝腎な部分が脱落してゐるといふ思ひを拭ひ去る事は出来ない。

民安かれ國安かれと祈念せられる「まつりごと」に一切觸れる事はない。御田植、御稻刈はあつても、五穀豊穰と國の安泰を祈る新年祭、そして豊かに稔つた新穀を神前に備へ神の恵に感謝する新嘗祭といふ宮中祭祀は目隠しされ、國民から遠ざけられた儘なのだ。(船橋市立市場小学校校長)

掌篇古 瑞穂の國の言葉盡し

◇主權恢復五十五周年・昭和の日施行奉祝◇
A五判二十八頁 三百五十圓 送料八十圓
振替〇〇一〇〇一〇二一三九〇七八荒魂之會

荒魂之會二十一年の來歴

平成八年四月
荒魂之會

一、本來歴には會報に掲載した、昭和五十年十月より平成七年十二月に至る二十一年間の荒魂之會の全會合（他團體の會合への出席も含む）の摘要を記載した。但し會報に脱落の分も補った。

二、記載は概ね、月日、種別（内容）、會場、人數の順である。

三、定例の會場は、發足より平成二年四月迄は船橋市の御嶽神社、同年五月よりは同神社隣接の中臺町會館である。定例の會場名の記載は夫々第一回分を除いて省略した。

四、内容欄の事項の大字の分は課題の書物の名稱である。昭和六十二年六月以降に見える内容欄末尾の記載事項は唱歌名である。

昭和五十年（第一年）

十月十一日（土）準備會（活動内容の協議）御嶽神社 九名
十一月八日（土）研究會（空拳と泥濘）十名
十二月十三日（土）研究會（草枕旅にしあれば）八名

昭和五十一年（第二年）

三月 會報第五號・百部刊（本號より一般配布、年三回刊）
八月 あらたま創刊號・四十頁・參百部刊（年二回刊）

一月十日（土）新年會（誌名をあらたまと定む）黒潮 十一名
二月十四日（土）研究會（日本語のこころ）九名
三月二十五日（木）二十六日（金）研修旅行（水戸方面）九名
四月十日（土）研究會（新校萬葉集・概論）十名
五月二十二日（土）研究會（新校萬葉集・大伴家持論）六名
六月十九日（土）研究會（肉食の思想）五名
七月十日（土）談話會（會報第六號書評欄を中心に）五名
九月十一日（土）研究會（新校萬葉集・茂吉と萬葉）十名
十月九日（土）研究會（閉された言語・日本語の世界）六名
十一月二十日（土）研究會（新校萬葉集・ますらをぶり）九名
十二月十一日（土）合評會（あらたま創刊號）並に第一回連歌の會

船橋市・武壽司 十一名

昭和五十二年（第三年）

年間主題・精神史としての日本文學史 會報・第八號第九號第十號
あらたま・第三號第四號 同胞各位に訴へる（十月刊）

一月八日（土）新年會（上野本牧亭の講談）ほんもく 八名
二月十二日（土）研究會（新校萬葉集・相聞の系譜）七名
三月十三日（日）合評會（あらたま第二號）十四名
四月九日（土）談話會（會の運営に關する協議）四名
五月二十一日（土）研究會（日本人の心の歴史上）七名
六月十一日（土）研究會（芥川の初期作品に就て）七名
七月十日（日）合評會（あらたま第三號）九名
八月二十二日（月）二十五日（木）研修旅行（飛鳥方面）十名
九月十日（土）研究會（日本人の心の歴史下）七名
十月八日（土）研究會（死の日本文學史）九名
十一月十九日（土）研究會（死の日本文學史Ⅱ再論Ⅰ）九名
十二月十日（土）第二回連歌の會 船橋市・黒潮 十一名

昭和五十三年（第四年）

年間主題・王朝文化の諸相 會報・第十一號第十二號第十三號
あらたま・第五號第六號 同胞各位に訴へる・其の二（十月刊）

一月二十九日（日）合評會（あらたま第四號）道入庵 十名
二月四日（土）研究會（平安朝の生活と文學）八名
三月十一日（土）研究會（世界と西歐）六名
四月十五日（土）研究會（往生要集）五名
五月十三日（土）研究會（古今集）八名
六月十七日（土）研究會（神道集）十三名
七月九日（日）合評會（あらたま第五號）九名
九月九日（土）研究會（王朝文化の諸相其の五・かなの發生）八名
十月二十一日（土）二十二日（日）研究會（梅干と日本刀）並に
散策（横須賀鎌倉方面）横須賀・新井閣 九名
十一月十八日（土）研究會（讀岐典侍日記）十一名
十二月十一日（月）講演會（樋口清之氏）二宮中學校 有志出席

十二月十六日(土) 編修會(少年詩歌撰の編修) 十名

◎編修會は、十二月三日、二十五日、一月十四日にも實施した。
昭和五十四年(第五年)

年間主題・日本の中世 會報・第十一號(第十四號(本年より
年四回刊、各三百部)あらたま・第七號第八號 少年讀本・第
一輯愛誦和歌發句撰(千部・四月刊) 同胞各位に訴へる・其の三
一月二十日(土) 新年會(上野鈴本の落語、第三回連歌の會) 笹
乃雪 十名 ◎連歌の會は本年より正月に實施と改む。

二月十八日(日) 合評會(あらたま第六號) 十名

三月十日(土) 研究會(風姿花傳) 八名

四月二十一日(土) 研究會(英語教育大論争) 十六名

五月十二日(土) 研究會(日本の中世其の二・小説史論) 十二名

五月二十七日(日) 少年讀本第一輯愛誦和歌發句撰出版記念會

パレスホテル 四十七名(石井勲、名越二荒之助、岩下保氏他)

六月十六日(土) 研究會(國語教育の現状) 十四名

七月八日(日) 合評會(あらたま第七號) 六名

八月二十六日(日) 第一回懇談會(佐々木奎文氏) 東天紅 十二名

八月二十六日(日) 二十九日(水) 研修旅行(立石寺他) 十名

九月三日(月) 講演會(樋口清之氏) 柏高等學校 有志出席

九月八日(土) 研究會(日本の中世其の三・神道) 十四名

十月一日(月) 講演會(石井勲氏) 津田沼高等學校 有志出席

十月一日(月) 第二回懇談會(石井勲氏) 津田沼・初音 九名

十月十三日(土) 十四日(日) 研究會(人間の建設) 並に散策

(一葉記念館他) 麴町會館 十名

十二月二十四日(土) 研究會(帝王後醍醐) 九名

十二月八日(土) 研究會(南洲翁遺訓) 七名

十二月十日(月) 講演會(石井勲氏) 二宮中學校 有志出席

昭和五十五年(第六年)

年間主題其の一・三島由紀夫研究 其の二・日本の中世再論
會報・第十八號(第二十一號 あらたま・第九號第十號 荒魂

之會名簿(四月刊、以後隔年刊) 同胞各位に訴へる・其の四

一月六日(日) 自衛隊初降下式 習志野空挺部隊 六名

一月十二日(土) 新年會並に第三回懇談會(太田行藏、岩下保兩
氏) 東京・おけさ茶屋 十三名

二月十七日(日) 合評會(あらたま第八號) 十三名

三月八日(土) 研究會(デモ・シカ教師の獨斷と偏見) 八名

三月二十日(木・祝) 第四回連歌の會 佐藤哲夫氏邸 十名

四月十二日(土) 研究會(潮騒) 九名

五月十日(土) 研究會(狂言集) 九名

六月十四日(土) 研究會(憂國) 十五名

七月十三日(日) 合評會(あらたま第九號) 八名

七月二十七日(日) 第四回懇談會(樋口清之氏) 東京・聚樂 十六名

八月二十七日(水) 第五回懇談會(中尾昭人氏) 佐藤氏邸 十四名

九月二十日(土) 研究會(室町記) 九名

十月十一日(土) 十二日(日) 研究會(文化防衛論) 並に散策

(鷗外記念館他) ホテルニュー上野 十四名(鈴木由次氏他)

十月二十五日(土) 現在の國語問題を考へる講演及び座談の會(千
葉縣教育問題聯絡協議會主催・市原豐太氏) 郷土資料館 五名

十一月八日(土) 研究會(室町記(再論)) 十名

十一月十四日(金) 講演會(村松嘉津女史) 二宮中學校 六名

十一月十四日(金) 第六回懇談會(村松嘉津女史) 佐藤氏邸 七名

十二月六日(土) 研究會(豐饒の海第一卷) 十一名

昭和五十六年(第七年)

年間主題其の一・「本居宣長」通讀 其の二・「豐饒の海」通
讀 會報・第二十二號(本號より四百部) (第二十五號 あら

たま・第十一號第十二號 要望書・學校教育に於る望ましい漢
字指導に就て(文部省並に教育用漢字調査研究協力者會議宛)・

新紙幣發行による肖像畫の改廢に就て(渡邊美智雄大藏大臣宛)

◎會報第二十四號第二十五號に夫々掲載。同胞各位に訴へる・

其の五(九月刊)

一月十一日(日) 新年會(第五回連歌の會) 佐藤氏邸 九名
二月八日(日) あらたま第十號合評並に懇親の會 東京・山の
ホテル 三十二名(太田行藏、橋本忠次、竹内輝芳、岩下保氏他)

三月十四日(土) 研究会(日本學入門) 六名

四月十日(金) 講演會(現代演劇協會主催・福田恆存氏) 三百人
劇場 同人會員十六名

四月十一日(土) 研究会(本居宣長) 十二名

五月五日(火・祝) 第七回懇談會(福田恆存氏) 雅緻園 二十四名

五月九日(土) 研究会(豐饒の海第二卷) 十三名

六月十三日(土) 研究会(本居宣長) 十二名

七月十二日(日) 合評會(あらたま第十一號) 十四名

七月二十六日(日) 第八回懇談會(市原豐太氏) 上野彌生會館 十四名
八月二十五日(火) 二十八日(金) 旅行(松阪伊勢・八名) 並に

懇談會(二十六日、野口恆樹氏・麻吉旅館九名、二十七日、關西
在住の諸氏・護王神社 十四名八木村松治郎、若井勳夫氏他)

九月十二日(土) 研究会(豐饒の海第三卷第四卷) 十二名

九月二十七日(日) 第九回懇談會(松原正氏) 東京・臨海莊 十名

十月三日(土) 研究会(茶の間の正義、つかぬことを言う) 十名

十月十八日(日) 第十回懇談會(石井勳氏) 東京・日本橋莊四十一名

十一月七日(土) 研究会(本居宣長第三章第四章) 道入庵 六名

十一月十三日(金) 講演會(宇野精一氏) 二宮中學校 有志出席

十一月十三日(金) 第十一回懇談會(宇野精一氏) 池田屋 六名

十一月二十一日(土) 講演會(現代演劇協會主催・福田恆存氏)

三百人劇場 有志出席

十二月十二日(土) 研究会(本居宣長第五章(第十三章) 十二名

十二月十九日(土) 講演會(現代文化會議主催・福田恆存氏) 高

輪プリンスホテル 有志出席

昭和五十七年(第八年)

年間主題其の一・福田恆存研究 其の二・「本居宣長」通讀(續)
會報・第二十六號(第二十九號) あらたま・第十三號第十四號

(但し翌年四月に遅延) 少年讀本・第二輯國語國史の常識(千
五百部、二月刊) 荒魂之會名簿(四月刊) 同胞各位に訴へる。
其の六(十月刊)

一月十日(日) 新年會(第六回連歌の會) 佐藤氏邸 十二名

二月二十一日(日) 報告會(あらたま第十二號合評並に活動報告)

東京・こだま莊 二十九名(藤澤一雄、萩野棟省、鎌田一步氏他)

三月十三日(土) 公開授業(荒井眞弓教諭の唐詩指導) 金杉臺小

學校 有志出席

三月十三日(土) 平山寛司著「説明的文章の讀解指導」刊行記念
並に合評の會 十四名

四月十七日(土) 研究会(文化なき文化國家) 十名

五月八日(土) 研究会(本居宣長) 道入庵 十三名

六月五日(土) 研究会(教育とは何か) 道入庵 九名

六月二十日(日) 第十二回懇談會(福田恆存氏) 東京・愛宕山東

急イン 二十六名(上田博和、高池勝彦、中村信一郎氏他)

七月十一日(日) 合評並に懇親の會(あらたま第十三號) 東京農

林年金會館 二十一名(市原豐太、村松嘉津、藤澤一雄氏他)

九月十二日(日) 研究会(本居宣長) 十二名 ◎會場の都合によ

り、例會日を以後第二土曜日の夜から第二日曜日の午後に変更。

十月三日(日) 研究会(私の幸福論) 八名

十一月六日(土) 七日(日) 研究会(私の國語教室) 並に散策

(芝増上寺から水上バスで淺草へ) 芝彌生會館 二十名

十二月十二日(日) 研究会(演劇入門) 九名

十二月二十六日(日) 研究会(人間この劇的なるもの) 十二名

昭和五十八年(第九年)

年間主題其の一・近世の諸人物 其の二・「本居宣長」通讀(續)
會報・第三十號(第三十三號) あらたま・第十五號第十六號

同胞各位に訴へる・其の七(十月刊)

一月九日(日) 新年會(第七回連歌の會) 佐藤氏邸 九名

二月十三日(日) 第三回活動報告會(荒魂之會活動報告並に實踐

報告)上野彌生會館 二十八名(石井勳、橋本忠次、藤田士郎氏他)

三月十三日(日) 研究会(鎖國の思想) 十三名

四月十日(日) 座談會(我等が國語の教育) 六名

四月十七日(日) 研究会(本居宣長) 十一名◎あらたま第十四號配布

五月八日(日) 研究会並に合評會(中朝事實) あらたま第十四號

六月十九日(日) 研究会(本居宣長) 十四名

七月十日(日) 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰第一回編修會 十五名

七月二十四日(日) 合評會(あらたま第十五號・福田恆存小論特輯號) 東京・葛飾 二葉會館 二十六名(福田恆存氏他)

八月一日(月) 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰第二回編修會 七名

八月二十一日(日) 第十三回懇談會(新田大作氏) 芝彌生會館 十七名

九月四日(日) 研究会(蘭學事始) 十四名

九月十五日(木・祝) 第十四回懇談會(松原正氏) 上野彌生會館

九月二十三日(金・祝) 少年讀本第三輯愛誦漢詩撰第二回編修會 九名

十月二日(日) 研究会(本居宣長) 十名

十月三十日(日) 第十五回懇談會(木内信胤氏) 芝彌生會館 十五名

十一月十二日(土) 十三日(日) 研究会(おらんだ正月、近世人

物夜話、瓢箪から駒)並に鎌倉散策(東慶寺) 東京・高輪莊 八名

十二月二十五日(日) 研究会(好色一代男、一代男新考) 十三名

昭和五十九年(第十年)

年間主題・小林秀雄研究 會報・第三十四號、第三十七號
あらたま・第十七號第十八號 少年讀本・第三輯愛誦漢詩撰(二千部、二月刊) 荒魂之會名簿(四月刊) 同胞各位に訴へる・其の八(十月刊)

一月八日(日) 新年會(第八回連歌の會) 佐藤氏邸 十二名

二月十九日(日) 第四回活動報告會(活動報告、あらたま第十六

號合評、實踐報告) 芝彌生會館 二十四名(竹内輝芳氏他)

三月十一日(日) 研究会(宰相鈴木實太郎 戦後思潮の超克) 十二名

四月八日(日) 研究会(小林秀雄全集第一卷第二卷) 道入庵 十一名

五月二十日(日) 研究会(小林秀雄全集第十一卷 戦争は無くならない) 十二名

六月十七日(日) 研究会(小林秀雄全集第八卷) 十二名

七月十五日(日) 合評會(活動報告、あらたま第十七號合評、實踐報告) 芝彌生會館 十九名(同人九名 一般十名)

九月九日(日) 研究会(小林秀雄全集第七卷第八卷) 十二名

十月十四日(日) 研究会(小林秀雄全集第九卷 我が皇國史觀) 淺間神社 十一名

十一月十八日(日) 研究会(近代の超克) 十名

十二月二十三日(日) 研究会(小林秀雄全集第十二卷) 十四名

昭和六十年(第十一年)

年間主題其の一・明治大正昭和三代詩歌を讀む 其の二・現代著作家を讀む 會報・第三十八號、第四十一號 あらたま・第十九號第二十號(刊行十年記念號、百二十六頁、九百五十部) 同胞各位に訴へる・其の九(十月刊)

一月十三日(日) 新年會(第九回連歌の會) 淺間神社 十四名

二月十七日(日) 第五回活動報告會(活動報告、あらたま第十八

號合評、實踐報告) 芝彌生會館 二十四名(佐藤亮策氏他)

三月十七日(日) 研究会(和歌俳句 乃木大將と日本人) 十名

三月十九日(火) 改定現代仮名遣い(案)の説明協議會(國語審議會主催) 九段會館 十七名(佐藤亮策、高池勝彦氏他)

四月十四日(日) 研究会(時流に反して) 道入庵 八名

◎同人下坂勝洋(千葉縣立津田沼高等學校教諭) 四月十五日死去

五月十二日(日) 第十六回懇談會(小堀桂一郎氏) 東京・葛飾 二葉會館 二十名(笹目善一郎、中村信一郎氏他)

五月十九日(日) 研究会(新體詩、東郷平八郎) 道入庵 十一名

六月二十三日(日) 研究会(月下の一群) 十四名

七月十四日(日) 合評會(活動報告、あらたま第十九號合評、實踐報告) 芝彌生會館 三十六名(笹目善一郎、上田博和氏他)

八月二十九日(木) 第一回小音楽會(提琴・副島爽子、土屋育代
兩嬢、ピアノ・二宮佳枝嬢) 船橋市・東部公民館 二十九名

九月八日(日) 研究會(唱歌、我が象徴派的人生) 十四名

十月十日(木・祝) 研究會(昭和詩鈔 日本のこころ) 十一名
◎同胞各位に訴へる・其の九並に國語國字問題を考へる有志の
會(代表・小堀桂一郎氏)の「緊急提言國語國字問題の論議を
國會に要望す」の發送作業をなす。

十一月九日(土) 十日(日) 研究會(我が愛する詩人の傳記) 並
に散策(飯盛山、鶴ヶ城) 會津若松・天龜 八名

十二月二十二日(日) 研究會(大人のしつけ紳士のやせがまん) 十三名
昭和六十一年(第十二年)

年間主題其の一・柳田國男折口信夫研究 其の二・現代著作家
を讀む(續) 會報・第四十二號(本號より四百五十部) 第四
十五號 あらたま・第二十一號(本號より千部) 第二十二號
荒魂之會名簿(四月刊) 同胞各位に訴へる・其の十(十月刊)
少年讀本・第四輯愛誦文章撰(二千部、十二月刊、題字・村松
嘉津女史) ◎國語國字問題を考へる有志の會主催の國語國字問
題を考へる國民集會の開催(二月、七月、十一月)に當つて、
企劃運営に加はつた。

一月十五日(水・祝) 新年會(第十回連歌の會) 船橋市・勝右衛門 十六名

二月十一日(火・祝) 第六回活動報告會(活動報告、あらたま第
二十號合評、實踐報告) 芝彌生會館 三十二名(佐藤亮策氏他)

二月二十二日(土) 國語國字問題を考へる國民集會(記念講演・
江藤淳氏 各界發表) 東京・東條會館 百五十名

三月九日(日) 研究會(小林秀雄 廣作吾輩は猫である) 十五名

四月六日(日) 研究會(變化 時代と私) 十三名

四月二十九日(火・祝) あらたま刊行十周年記念懇親會(國歌齊
唱、活動報告、感謝狀贈呈・宮坂健三氏、祝辭・市原豐太、古
賀俊昭、佐藤亮策、照屋佳男、粉川宏氏、祝詞祝電・鐸木俊三、
三瀨信吾氏、祝賀演目・和太鼓他、唱歌花之彌生會館 四十九名

五月十一日(日) 研究會(折口信夫全集第一卷 先祖の話) 十三名

五月二十五日(日) 第十七回懇談會(落合欽吾氏) 二葉會館 二十名

六月十五日(日) 愛誦文章撰第一回編修會 九名

六月二十二日(日) ◎座談會(現代著作家案内) 九名◎研究會
(木綿以前の事 折口信夫全集第七卷) 十五名

六月二十八日(土) 愛誦文章撰第二回編修會 十一名

七月五日(土) 國語國字問題を考へる第二回國民集會(記念講演・
粉川宏氏 各界發表 集會宣言) 東條會館 九十名(懇親會二
十六名) ◎集會宣言は選舉期間中の七月一日に急遽出された現
代仮名遣い内閣告示訓令に抗議するものであつた。

七月六日(日) 愛誦文章撰第三回編修會 八名

七月十三日(日) 合評會(活動報告、あらたま第二十一號合評、
實踐報告) 芝彌生會館 二十三名(關正臣、中村信一郎氏他)

七月二十五日(金) 愛誦文章撰第四回編修會 八名

八月一日(金) 愛誦文章撰第五回編修會 七名

九月七日(日) 研究會(殊の力 折口信夫全集第三卷) 道人庵 十四名

十月十日(金・祝) 研究會(海上の道) 十二名

十月十八日(土) 第一回關西懇談會 名古屋・地産ホテル 六名
(同人四名 一般二名(鐸木俊三、魚谷哲央氏))

十一月九日(日) 研究會(遠野物語) 道人庵 九名

十一月二十九日(土) 國語國字問題を考へる第三回國民集會(記
念講演・宇野精一氏 國會の動き・滝沢幸助氏 各界發表) 芝
彌生會館 八十名

十一月三十日(日) 第十八回懇談會(阿部正路氏) 二葉會館 十九名

十二月二十一日(日) 研究會(折口信夫全集第二十三卷) 十二名
昭和六十一年(第十三年)

年間主題其の一・日本浪漫派研究 其の二・福田恆存全集を讀
む 會報・第四十六號、第四十九號 あらたま・第二十三號第
二十四號 同胞各位に訴へる・其の十一(十月刊) ◎國語國字
問題を考へる有志の會主催の第四回國語國字問題を考へる國民

集會の開催(十二月)に當つて、企劃運営に加はつた。又、同會の國語國字問題資料第一冊の刊行(七月刊)に當つて、編輯に加はつた。

一月十八日(日) 新年會(第十一回連歌の會) 勝右衛門 十二名

二月一日(日) 第七回活動報告會(活動報告、あらたま第二十二號合評、實踐報告) 芝彌生會館 二十九名(富士信夫氏他)

三月十五日(日) 研究會(保田與重郎全集第四卷、福田恆存全集第一卷) 道入庵 十二名

四月十二日(日) 研究會(保田與重郎全集第十卷) 道入庵 十一名

五月十日(日) 研究會(天の夕顔、福田恆存全集第二卷) 二宮中學校 十一名

六月十四日(日) 研究會(定本淺野晃全詩集) 二宮中學校 十三名

六月二十一日(日) 第十九回懇談會(福田恆存氏 謠曲、提琴演奏、箱根八里) 東京・愛宕山東急イン 四十名(中尾昭人氏他)

七月十八日(土) 合評會(活動報告、あらたま第二十三號合評、實踐報告) 村祭 芝彌生會館 十二名(佐藤亮策、關止臣氏他)

九月十三日(日) 研究會(伊東靜雄詩集、福田恆存全集第三卷) 十一名

十月十八日(日) 研究會(日本史新論 紅葉) 二宮中學校 十一名

十一月八日(日) 研究會(田園の憂鬱 明治節) 道入庵 九名

十二月五日(土) 國語國字問題を考へる第四回國民集會(記念講演・村尾次郎氏 國會の動き・滝沢幸助氏 各界發表 集會宣言) 芝彌生會館 九十名

十二月十三日(日) 研究會(我が萬葉集 故郷) 十二名

昭和六十三年(第十四年)
年間主題其の一・近世典籍を讀む 其の二・福田恆存全集を讀む(續) 會報・第五十號(二月刊・卷頭に八昭和六十二年聖上米壽の賀を壽ぎ奉る)といふ賀詞を謹載) 第五十三號 あらたま・第二十五號第二十六號 別冊あらたま・其の一・正統表記の實踐(十六頁、二百部、七月刊) 荒魂之會名簿(七月刊、

從來の隔年四月刊を改む、同人十二名 贊助會員二百七名) 同胞各位に訴へる・其の十二(十月、今回で終了) ◎國語國字問題を考へる有志の會主催の第五回國語國字問題を考へる國民集會の開催(十一月)に當つて、企劃運営に加はつた。

一月十七日(日) 新年會(第十二回連歌の會 一月一日) 勝右衛門 十三名(佐藤亮策、粉川宏、中村信一郎、高池勝彦氏他)

二月十四日(日) 研究會並に合評會(近世崎人傳、あらたま第二十四號 紀元節) 道入庵 十五名(青木英實氏他)

三月十三日(日) 研究會(福田恆存全集第五卷 さくら) 九名

四月十日(日) 研究會(五輪書 天長節) 十一名

五月八日(日) 研究會(奥の細道 櫻井の訣別) 九名

五月十五日(日) 第二回關西懇談會(實踐報告 講話・所功氏 櫻井の訣別) 京都・護王神社 十九名(若井勳夫、中島哲平氏他)

六月五日(日) 研究會(福田恆存全集第六卷 荒城の月) 七名

七月三日(日) 福田恆存全集完結記念並に福田恆存先生喜壽の賀祝賀會(實踐報告 祝宴) 記念品贈呈、乾杯、祝詞、祝賀演目、福田譯夏の夜の夢朗誦、荒城の月) 芝彌生會館 四十六名(福田氏御夫妻、落合欽吾、滝沢幸助、日比義也、柿沼光造氏他)

七月十日(日) 研究會並に合評會(西洋紀聞、あらたま第二十五號 我は海の子) 十一名

九月十一日(日) 研究會(雨月物語 濱邊の歌) 道入庵 十一名

十月二日(日) 研究會(海國兵談 旅愁) 二宮中學校 八名

十一月五日(土) 國語國字問題を考へる第五回國民集會(記念講演・阿川弘之氏 各界發表 集會宣言) 芝彌生會館 百名

十一月十二日(土) 十三日(日) 研究會(日本外史 明治節) 並に散策(滿福寺他) 鎌倉・海風莊 十四名(粉川宏氏他)

十二月十一日(日) 研究會(初山踏 椰子の實) 十名

昭和六十四年平成元年(第十五年)
年間主題其の一・幕末維新の人々 其の二・福田恆存全集を讀む(續) 會報・第五十四號(卷頭に、八謹しみて昭和の御世を

送り平成の御世を迎へ奉る」といふ章句を謹載) (第五十七號 (紙碑・懐しき人々) 八宮下眞二、桶谷繁雄、木村松治郎、新田大作、藤澤一雄、竹内輝芳、村松嘉津七氏の追悼記) (掲載) あらたま・第二十七號第二十八號 調査・定期刊行物に於る年表示の實態 (四月刊、三頁 七百五十部) 別冊あらたま・其二・夜麻登志宇流波斯(先帝陛下奉悼文集) (七月刊、三百部 題字・落合欽吾氏) (賛助會員宛の年末の挨拶状に、先帝陛下の諒閣中につき、平成二年年頭の御挨拶は遠慮申上げたき旨を記す。◎同人小川雅照、豊源太の筆名にて、「國語の復権」を上梓す。(八月、洛風書房刊)

- 一月二十二日(日) 特別會合(深川周邊史蹟散策並に先帝陛下の御遺徳を偲び奉る會) 東京・芭蕉記念館 二十名◎當初の豫定では、深川周邊の史蹟散策の後で第十三回連歌の會を行ふものであったが、先帝崩御に鑑み、連歌の會を改めたものである。先帝陛下の御神靈に黙禱を捧げ、恆例の唱歌一月一日は中止す。
- 二月十九日(日) 研究會並に合評會(南洲翁遺訓 あらたま第一十六號 海行かば) 道入庵 十五名
- 三月十二日(日) ◎座談會(近世の學舎を語る) 七名◎研究會(一外交官の見た明治維新 敦盛と忠度) 道入庵 十名
- 四月九日(日) ◎研究會(福田恆存全集第七卷 花) 勝右衛門 十五名◎第十三回連歌の會 十三名(佐藤亮策、粉川宏氏他)
- 五月十四日(日) 研究會(氷川清話 春の小川) 中臺町會館 九名
- 六月十一日(日) 研究會(長崎海軍傳習所の日々 鎌倉) 十三名
- ◎あらたま第二十七號の配布並に發送作業。作業終了後、席を改めて夕食會を實施、以後定例とす。
- 七月九日(日) 研究會並に合評會(橘曙覽歌集 あらたま第二十七號 箱根八里) 中臺町會館 九名
- 九月十日(日) 研究會(福田恆存全集第八卷 紅葉) 並に國語の復権出版記念懇親會 勝右衛門 十六名(高池勝彦氏他)
- 十月八日(日) 研究會(啓發錄 村祭) 中臺町會館 九名

- 十月二十九日(日) 世田谷史蹟散策(松陰神社、豪徳寺他) 六名
- 十一月十二日(日) 研究會(日本俘虜實記 明治節) 道入庵 十名
- 十二月十日(日) 研究會(講孟割記 螢の光) 十三名
- 平成二年(第十六年)

年間主題其の一・小林秀雄保田與重郎研究 其二・少年讀本第五輯の編修 會報・第五十八號(二月刊、巻頭に、奉祝・皇紀二千六百五十年並に今上陛下御即位の御大典)といふ章句を掲げた。又、新刊紹介欄に先帝陛下の御遺著『皇居の植物』を謹載。(第百一十一號 あらたま・第二十九號第三十號(十二月刊、十五年記念號) 調査・新聞に於る年表示と表記との實態(四月刊、四頁 九百部) 荒魂之會名簿(七月刊) 少年讀本・第五輯言葉盡し(十一月刊、二千五百部、皇紀二千六百五十年並に今上陛下御即位の御大典奉祝出版 題字・福田恆存氏)

- 一月二十八日(日) 新年會(隅田川周邊史蹟散策並に第十四回連歌の會 一月一日) 東京・百花園集會室 十三名(平山寛司氏他)
- 二月十一日(日・祝) 池上方面史蹟散策(本門寺他) 五名
- 二月十八日(日) 研究會並に合評會(保田與重郎全集第五卷、あらたま第二十八號 紀元節) 道入庵 十三名
- 三月十一日(日) 少年讀本第五輯第一回編修會 六名
- 三月二十一日(水・祝) 研究會並に編修會(保田與重郎全集第八卷 少年讀本第五輯第二回編修會 仰げば尊し) 十一名
- 四月一日(日) 少年讀本第五輯第三回編修會 七名
- 四月八日(日) 研究會(本居宣長補記 荒城の月) 道入庵 九名
- 四月二十二日(日) 少年讀本第五輯第四回編修會 道入庵 六名
- 五月三日(木・祝) 少年讀本第五輯第五回編修會 中臺町會館(以後定例の會場は本會館に變更。記載も御嶽神社に倣つて省略。)
- 五月十三日(日) 研究會並に編修會(保田與重郎全集第十五卷 少年讀本第五輯第六回編修會 鎌倉) 八名
- 五月二十七日(日) 横須賀鎌倉方面散策(三笠、東慶寺他) 七名
- 六月三日(日) 少年讀本第五輯第七回編修會 道入庵 四名

六月十日(日) 研究會並に編修會(保田與重郎全集第二十七卷

少年讀本第五輯第八回編修會 我は海の子) 十名

六月二十四日(日) 少年讀本第五輯第九回編修會 五名

七月八日(日) 佐原方面散策(鹿島神宮、伊能忠敬生家他) 十一名

七月十五日(日) 研究會並に合評會(保田與重郎全集第十七卷、

あらたま第一十九號 濱邊の歌) 十一名

七月三十日(月) 少年讀本第五輯第十回編修會 六名

八月一日(水) 小田原箱根方面散策(舊街道踏破他) 七名

八月二十六日(日) 隅田川方面散策(御臺場公園、納涼船) 七名

九月二日(日) 研究會(白鳥宣長言葉 椰子の實 勝石衛門 十四名

九月十六日(日) 少年讀本第五輯第十一回編修會 四名

九月三十日(日) 少年讀本第五輯第十二回編修會 四名

十月七日(日) 研究會(浪曼派變轉 旅愁) 九名

十一月三日(土・祝) 代々木方面散策(御聖徳記念繪畫館他) 並

に劇團昂公演の觀劇(邯鄲 綾の鼓) 三百人劇場 五名

十一月十一日(日) 研究會並に少年讀本第五輯披露(保田與重郎

全集第三十二卷 明治節) 八名◎翌日(十二日)の御大典を奉

祝し國旗を掲げ國歌を齊唱す。

十一月十七日(土) 御大典奉祝提燈行列 皇居前廣場 九名

十二月十六日(日) 研究會(保田與重郎全集第三十二卷 天長節)

十名◎御大典奉祝歌「平成の御代をたたえん」を齊唱す。

平成三年(第十七年)

年間主題・明治諸人物研究 會報・第六十二號(二月刊、「同

人回顧・あらたまの十五年」を掲載。) 第六十五號 あらた

ま・第三十一號第三十二號 別冊あらたま・其の三・かりがね

集(五月刊、三十六頁 三百部、題字・平山寛司氏) 合本同胞

各位に訴へる(十月刊、六十四頁、五百部 題字・平山氏)

二月二十日(日) 新年會(谷中周邊史蹟散策並に第十五回連歌の

會 一月一日) 笹乃雪 十六名◎平成の御代をたたえんを齊唱。

二月十七日(日) 研究會並に合評會(東洋の理想 あらたま第三

十號 紀元節) 道入庵 十名

三月十七日(日) 研究會(代表的日本人 廣瀬中佐) 八名

三月二十一日(木・祝) 横濱方面散策(三溪園他) 十一名

四月七日(日) ◎座談會(この一年の昂の舞臺) 四名◎研究會

(日本開化小史 日の丸の旗) 九名

五月十二日(日) ◎研究會(歌よみに與ふる書 花) 十一名◎あ

らたま刊行十五周年關係物故者慰靈祭(祭典並に追悼會) 十四名

五月二十六日(日) 小田原方面散策(一夜城蹟他、途次、中河與

一氏邸訪問) 六名

六月九日(日) 研究會(眞善美日本人 故郷) 九名

七月十四日(日) 研究會並に合評會(日本風景論 あらたま第三

十一號 我は海の子) 七名

八月二十五日(日) 都電荒川線方面散策(漱石生誕の地他) 八名

九月八日(日) 研究會(臺灣錄 大東亞戰爭への道 村怒) 十二名

十月六日(日) 研究會(明治人物夜話 紅葉) 九名

十月二十七日(日) あらたま刊行十五周年記念懇親會(活動報告

實踐報告 祝宴 紅葉 芝彌生會館 三十九名(小田村四郎氏他)

十一月十日(日) 研究會(幕府衰亡論 明治節) 七名

十二月八日(日) 名古屋方面散策(明治村、熱田神宮他) 十二名

平成四年(第十八年)

年間主題其の一・鷗外漱石研究 其二・福田恆存翻譯全集を

讀む 會報・第六十六號(千葉市の政令都市への移行に伴ふ荒

魂之會所番地の變更、會報巻頭記事の總題を我が文化防衛から

春夏秋冬への變更、例會の通稱名みたけサロンの廢止の三點を

記載) 第六十九號 あらたま・第三十三號第三十四號 別冊

あらたま・其の四・春夏秋冬(四月刊 四十五頁 三百部 題

字・片岡正彦) 荒魂之會名簿(七月刊 五頁 二百五十部)

一月十二日(日) 新年會(小岩柴又周邊散策並に第十六回連歌の

會 一月一日) 東京・川甚 十三名(佐藤亮策 平山寛司氏他)

二月九日(日) 研究會並に合評會(吾輩八猫デアル あらたま第

三十二號 紀元節) 十一名

三月八日(日) 研究会(阿部一族 金剛石) 十名

三月二十日(金・祝) 川越史蹟散策(喜多院他) 九名(平山寛司氏他)

四月五日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第五卷 日の丸の旗) 九名

四月二十九日(水・祝) 〇武蔵野御陵參拜 九名(平山寛司氏他)

〇主權恢復國民大會 乃木神社尙武館 八名(高池勝彦氏他)

五月十日(日) 研究会(草枕 四條巖) 九名

五月三十一日(日) 文豪中河與一寄贈コレクション特別展並に記念講演會 小田原市郷土文化館並に舊古稀庵 三名

六月七日(日) 研究会(智慧袋 故郷) 九名

六月二十八日(日) 明治神宮參拜並に根津本郷方面散策 十名

七月十二日(日) 研究会並に合評會(私の個人主義 あらたま第三十三號 我は海の子) 十一名

九月十三日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第四卷 橋中佐) 十名

十月四日(日) 青山方面散策並に觀能 國立能樂堂 五名

十月十八日(日) 研究会(假名遣意見 大こくさま) 九名

十一月三日(火・祝) 箱根散策(大名行列見物他) 七名

十一月八日(日) 研究会(澁江抽齋 明治節) 八名

十二月十三日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第六卷 天長節) 九名

十二月二十三日(水・祝) 荒魂之會天長節奉祝式典並に祝賀會(式典 祝宴 天長節) 芝彌生會館 二十八名(三瀧信吾氏他)

平成五年(第十九年)

年間主題其の一・明治の作家 其二・福田恆存翻譯全集を讀む(續) 會報・第七十號(卷頭に、「奉祝第六十一回伊勢の神宮御遷宮平成五年十月齋行」の章句を謹載) 第七十三號(續紙碑・有賀清之助、野口恆樹、太田行藏、市原豐太、鐸木俊三、佐藤亮策、星運吉七氏の追悼記を掲載。) あらたま・第三十五號第三十六號 別冊あらたま・其の六・續かりがね集(四月刊、三十六頁 三百部 題字・平山氏) 其の七・ふみぐら(十一月刊 九十四頁 千部 御遷宮奉祝出版 題字・宇野精一氏)

一月十日(日) 新年會(江古田周邊散策並に第十七回連歌の會) 東京・多可良園 十二名(粉川宏、田口義昌氏他)

一月二十四日(日) ふみぐら第一回編修會 八名

二月七日(日) 研究会並に合評會(日本文壇史第四卷 あらたま第三十四號 紀元節) 八名〇定例の會合は第一日曜日午後に変更。

二月十四日(日) ふみぐら第二回編修會 七名

二月二十八日(日) ふみぐら第三回編修會 五名

三月七日(日) 〇研究会(日本橋 仰げば尊し) 七名〇ふみぐら第四回編修會 八名

三月二十一日(日) ふみぐら第五回編修會 六名

三月二十八日(日) ふみぐら第六回編修會 六名

四月四日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第一卷 埴生の宿) 十名

四月十日(土) ふみぐら第七回編修會 六名

四月二十五日(日) ふみぐら第八回編修會 五名

五月八日(土) ふみぐら第九回編修會 三名

五月十六日(日) 研究会(たけくらべ 荒城の月) 七名

五月二十九日(土) ふみぐら第十回編修會 四名

六月八日(日) 研究会(明治日本の面影 濱邊の歌) 六名

七月四日(日) 研究会並に合評會(綠雨警語 あらたま第三十五號 橋中佐) 七名

七月十日(土) ふみぐら第十一回編修會 九名

七月十七日(土) ふみぐら第十二回編修會 六名

七月二十三日(金) ふみぐら第十三回編修會 五名

七月二十九日(木) ふみぐら第十四回編修會 七名

九月五日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第二卷 旅愁) 八名

九月二十五日(土) ふみぐら第十五回編修會 五名

十月二日(土) ふみぐら第十六回編修會 五名

十月十七日(日) 研究会(武蔵野 椰子の實) 九名

十一月七日(日) 研究会(運命 明治節) 九名

十一月二十三日(火・祝) 皇居周邊史蹟散策 十二名(田口義昌氏他)

十二月十二日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第三卷 天長節) 八名
十二月二十三日(木・祝) 天長節祝賀會(天長節祝賀會實行委員
會主催) 靖國會館 六名
平成六年(第二十一年)

年間主題其の一・國書縱覽其の一・詩歌 其の二・福田恆存翻譯全集を讀む(續) 會報・第七十二號(卷頭に、「平成六年・日本の友汪兆銘歿後五十周年・昭和十九年十一月十日逝去」の章句を掲載) 第七十五號 あらたま・第三十七號第三十八號
荒魂之會名簿(七月刊)

一月九日(日) 新年會(深川方面散策並に第十八回連歌の會 一月一日) 東京・清澄庭園涼亭 十四名(平山寛司、田口義昌氏他)
二月六日(日) 研究会並に合評會(古今和歌集 あらたま第三十六號 紀元節) 九名

三月六日(日) 研究会(新古今和歌集 螢の光) 十名◎皇太后陛下御降誕を奉祝して國歌を齋唱す。
四月三日(日) 多摩方面史蹟散策(多摩聖蹟記念館他) 十名
四月十日(日) 研究会(梁塵秘抄 春の小川) 九名◎御大婚三十五周年を奉祝して國歌を齋唱す。

五月一日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第七卷 櫻井の訣別) 十名
五月二十九日(日) 少年讀本刊行十五周年記念懇親會(活動報告、實踐報告 祝宴 櫻井の訣別) 芝彌生會館 三十名(石井勳氏他)

六月五日(日) 研究会(金槐和歌集 箱根八里) 七名
七月三日(日) 研究会並に合評會(連歌集 あらたま第三十七號 鎌倉) 十名
七月二十六日(火) 九十九里方面散策(伊藤左千夫生家他) 八名

九月四日(日) 研究会(福田恆存翻譯全集第八卷 埴生の宿) 十二名
九月十日(土) 十一日(日) 濱松方面散策(小夜の中山、賀茂眞淵記念館他。途次、松田福松氏邸訪問) 十四名(鈴木俊雄氏他)
十月二日(日) 研究会(芭蕉七部集 村祭) 御嶽神社 八名
十一月六日(日) 研究会(和漢朗詠集 明治節) 十一名

十二月十一日(日) ◎研究会(蕪村集) 十名◎故福田恆存先生を偲ぶ會(默禱 獻杯 福田先生を偲ぶ 水師營の會見) 十二名
十二月二十三日(金・祝) 天長節奉祝式典並に祝賀會(天長節を祝ふ會主催) 東京・グランドヒル市ヶ谷 四名
平成七年(第二十二年)

年間主題其の一・國書縱覽其の二・物語隨筆 其の二・樋口清之「日本人の歴史」を讀む 會報・第七十八號(卷頭に、「平成七年・日清戰爭終結百周年、日露戰爭終結九十周年、大東亞戰爭終結五十周年」の章句を掲載。) 第八十一號(紙碑其の三・大熊章一、白井傳、木内信胤、小見山登、福田恆存、中河與一、原田種成七氏の追悼記を掲載) あらたま・第三十九號第四十號(刊行二十年記念號) 別冊あらたま・其の八・福田恆存の世界(四月刊、八十三頁、五百部 題字・平山氏)

一月八日(日) 新年會(皇居から後樂園方面への散策並に第十九回連歌の會 一月一日) 後樂園内・涵徳亭 十五名(粉川宏氏他)
二月五日(日) ◎研究会並に合評會(竹取物語 あらたま第三十八號 紀元節) ◎故中河與一先生を偲ぶ會(默禱、獻杯、中河先生を偲ぶ) 十一名

三月五日(日) 研究会(『日本國の研究』の討論會 早春賦) 十三名
四月二日(日) 研究会(日本人の歴史第一卷 七里ヶ濱の哀歌) 八名
五月七日(日) 研究会(枕冊子 茶摘) 十一名
六月四日(日) 研究会(更級日記 我は海の子) 十二名

七月二日(日) 研究会並に合評會(宇治拾遺物語 あらたま第三十九號 箱根八里) 八名
九月三日(日) 研究会(日本人の歴史第二卷 紅葉) 九名
十月一日(日) 研究会(方丈記 旅愁) 六名
十一月五日(日) ◎研究会(平家物語 明治節) 九名◎故福田恆存先生一周忌追悼の會(默禱、新潮カセットブック・ハムレットの拜聴、福田先生を偲ぶ) 十二名

十二月十日(日) 研究会(徒然草 天長節) 十一名

あらたま
連歌の會
十五回詠草
平成三年
四月

第一回 昭和五十一年十二月十一日(土)

會場 武壽司 出席者 十一 句數 十三

あらたまの年にかかぐる日のみ旗

たのむことあればなほ憂き世の中

子供らはとつ國作りの風あげて

あふぎみするは富士の高嶺

黒幕もとそげんなり今朝の春

頭かりたるこれのものふ

風寒く憤りばかりをかしくて

あげつらふ人猿にかも似る

角榮も返りたるなり衆議院

それにつけても金の世の中

わがやどはいささ群竹六疊一間

音もかそけき新妻の聲

討入りもせまればすしを取るといふ

第二回 昭和五十二年十二月十日(土)

會場 黒潮 出席者 十一 句數 十八

あらたまの同人つどひて年忘れ

あんこう知らぬ下戸も集まる

あまえびも越の海よりさそはれて

安吾偲びて妻と語らふ

月も今忘れ去られておもちつき

かすかに見える人工衛星

房州にふみわすれたる人ばかり

圓高外爲おびゆる日の本

腰ぬかす婆も大臣を笑ひをり

となりに住める花咲ぢぢい

初戀は夢にも遠くなり果てて

枕邊に立つ雪の山茶花

みたけにも若き乙女が咲きにほひ

おぼろの道はゆきのこの道

遠くより見ゆるあかりのなやましき

たぬききつねも水浴びてをる

入り果てて鳴る鐘の音の響けかし

魚のうろこもふるへてをるらん

第三回 昭和五十四年一月二十日(土)

會場 笹乃雪 出席者 十 句數 八

うぐひすの初音待たるる笹乃雪

いつ訪づるやあらたまの友

國想ふ熱き心に誘はれて

つちのとひつじまづは一獻

月竝の發句ひねらん同人と

炭焼く人のたつき尋ねつ

中河の與一の大人の文を見て

忍ぶ戀あり不忍の池

第四回 昭和五十五年三月二十日(木)

會場 佐藤氏宅 出席者 十 句數 八

杉の香のかをりてゆかし春の舎に

新室祝ひて雀飛び交ふ

水ぬるむ八木ヶ谷の里に子ら遊び

陸奥の舟唄電蓄で聴く

主待つ法師も無聊月天心

なみなみとつげ荒魂の酒

はるばると遠き地の友歩み來て

「人生本來無一物」

第五回 昭和五十六年一月十一日(日)

會場 佐藤氏宅 出席者 九 句數 十八

あらたまの魂も和みて明けにけり

日の出明るき下總の春

習志野の霜踏み分けて朝の立つ

手綱控へて集ふ面々

月仰ぎやせがまんして嫁送り

うれしうれしの八木ヶ谷の里

見渡せば川も畑も春にして

齒ごたへもなき粥の味かな

戀ふ人の便りもとだえ胸ふたぎ

正字正假名雁の訪れ

人の名も地の名も捨てむ「瀧の音」

なぜに届かぬ我が想ひかな

年寄りも見所のある寒き寝屋

雪の日に鳴く猫の睦言

老妻も今朝は祕かに若やいで

大雑刀を振ふ勢ひ

花の下巴御前の緋の袴

寂しき月は西行と見む

第六回 昭和五十七年一月十日(日)

會場 佐藤氏宅 出席者 十二 句數十六

あらたまにめでたき人のちぎりかな

ほのかほのかと酌みかはず酒

やうやくに讀本二輯を書きあげて

心もかるし鐵道の

初夢は七萬圓の旅行なり

異國の月も朧もちつけ

手を引きてともに歩けば春の空

今はおぼろな花嫁の顔

戀ふる故汝が初産を共にせん

厚木の山に嬬尋ねて

座間の村松頼すずしき人のあり

夜目にもしるき花の白さよ
梅の香をなつかしみふみを讀む

大和心は正假名遣

腰すゑていろは教へん七年目

親子論語で道を正さん

第七回 昭和五十八年一月九日(日)

會場 佐藤氏宅 出席者 九 句數 十八

あらたまを酒のさかかに七福神

舟ばた叩く鯛の群かな

松が枝に天女の姿仰ぎ見て

白雲なびく甲斐の山なみ

月あかり破れぶすまや子澤山

筆とる程の力さへ無し

初戀の人より届く年賀狀

單車飛ばして親を欺く

辭書買ふとねだる小金が酒になり

花散る里の池をめぐりて

けふもまた見果てぬ夢の覺ゆる夜に

葛城山の翁訪ねむ

神宮の曆一本たづさへて

教科書騒動嘆くものふ

田中曾根右も左もいはくあり

いとも賑はふだるま市かな

軒先にしめなは張りて春待つと

富士見の宴に集ふあらたま

第八回 昭和五十九年一月八日(日)

會場 佐藤氏宅 出席者 十二 句數十八

甲子のうき世を流すおとそかな

つゆとくとくとこの音よろし

甘えびもうにもありける宴して

ひそかに慕ふかつらぎの森
けふもまた夜寒に冴ゆる月一つ

美男も美女も一つ家のうち

世の中をうれしと思ひ經を捨て

弓矢取る手に筆持ちて立つ

漢詩撰書き繼ぐ部屋に日は暮れて

峨眉山月に雲流れゆく

寺小屋を叩きそこねて草履取り

皇國へ歸る修學の道

和歌發句國語國史に漢詩撰

俐巧が馬鹿に負くるこのごろ

山里に花は變らず咲きにけり

初音樂しむ高野臺にて

曾我五郎の和風は上れ向ひ風

どの駒借りて遠掛けをせむ

第九回 昭和六十年一月十三日(日)

會場 淺間神社 出席者 十四 句數十八

初春の稻毛の森に祝ひけり

拍手高く揺るる振袖

貴人の牛車の音もしのばれて

道に寄り来る老いも若きも

ふるさとの母を戀ひつつ月仰ぐ

夜長に語る高坏の酒

大磯に一人はるる招かれて

還曆まではあと一歳ぞ

感覺といふ文春のたはげごと

騒ぐマスコミいろはも知らず

筑波嶺に蝦蟇の鳴音も絶えにけり

建命の戀ぞつりて

比賣命の隠れ給ひて幾歳ぞ

紀元節さへ忘るる世の中
菊の花半ばを裁ちて五千圓

新渡戸稻造武士道あはれ

あらたまの歩みはよしや遅くとも

集ひて祈るいや重け吉事

第十回 昭和六十一年一月十五日(水)

會場 勝右衛門 出席者 十六 句數 八

還曆や我虎の子とならんかな

春のぞみの豊かなること

うぐひすのささなき聞こゆ谷寒く

かはづは眠りむさぼりてゐむ

線なるふるさとの山月淡し

笛おもしろき夏祭りかな

ひそやかに帶止めを買ふ宵の戀

武藏相模の人も集へり

第十一回 昭和六十二年一月十八日(日)

會場 勝右衛門 出席者 十二 句數十八

初春も休まず巡る水車かな

昭和めでたし後の丁卯

宮城は日の丸の波人の波

この日缺かさず老いの忠節

年の瀬の書庫に射入る寒の月

竝ぶ列子は價千金

讀本も四冊揃ひ世に出でて

結ぶ縁の引物となれ

言靈の幸ふ國の文の華

正字で試す就職戦線

北京では文字も政治も明日は闇

李白王維の友はいづこに

別れとて月を浮べて飲む酒や

島抜け後の怒りの御神火
小役人國語いちりの愚を重ね

仇討ち取らむ蕎麥屋の二階
易き世に福田全集花と咲け

新たに期する荒魂の宴

第十二回 昭和六十三年一月十七日(日)

会場 勝右衛門 出席者 十三 句數十八

進水式の日取りも決まる初御空(粉川)

えんやえんやと聲を合はせて

初日の出富士を遠くに見やるらむ

東郷ビルでまづは一献

一人立つ大島月を背に浴びて

いざ戦はん荒魂の道

日の本の證を忘るる讀賣と

女王陛下の膝で死ぬ夢

道鏡も今ぞ敗れよ仇心

勳は長く濠端に立つ

旗を振り陛下の御姿あふぎみて

狛犬さんもあつと驚く

大地震に月も傾く千葉の杜

ドイツニイランドは今日も大入り

我が齒科醫正字正假名嫁運び

略字日本で婿に取られて

浦安のこがはの岸邊に咲く花ぞ

米壽ことほぎいや重け吉事

第十三回 平成元年四月九日(日)

会場 勝右衛門 出席者 十三 句數十八

肅として草木芽吹く朝かな(平山)

恩師の町へ自轉車で行く

外國の板門店に立つ子等は

花過の風古愁募りて

故郷の友皆老いにける臘月

繪馬は斜めに海へ坂道

白球に嬌聲あぐる甲子園

日翳りゆく學舎の窓

思ひ出の人の瞳ばかりつばめとる

大道藝人今は何處に

水無月の祓ひも近し緋の袴

茜袴に茶を摘む乙女

月組は静かにしなさい哺育園

漢字教室荒魂之會

老公の道を訪ねて今日もまた

弘道館に梅を見る縁

平成に願をかけたる里神樂

道の友こそ未めでたけれ

第十四回 平成二年一月二十八日(日)

会場 百花園 出席者 十二 句數 十八

諒闇も明けて匂へる梅の花(中澤)

曉寒く立つ霜柱

懷手午後の座椅子の物忘れ

隅田巡りの日數數へて

人麻呂の繪姿に入る寒の月

百花園にて風正す酒

歌詠めと仲居の媪の面憎や

黒髪ばざり疊打つなり

世を込めて語る睦言萩の袖

言葉盡しに時を忘れて

世直しの熱き思ひを秘め給ふ

二階の書庫に筆走る音

満月光「あ」風見鶏飛ぶやうな

「不破」の關守黃旗なびかせ

今様も天下分け目の時近し

女大臣に打つちやり決まる

宮人の蝶よ花よと謳はれて

あらたま連歌の會十五回出席者一覽(昭和五十一年十二月〜平成三年一月)四十一名	
出席者	一
佐藤 哲夫	二
本間 一誠	三
倉 成	四
角山 正之	五
下地 正信	六
下坂 勝洋	七
三宅 義藏	八
川畑 賢一	九
駒井 鐵平	十
吉田 道明	十一
伊勢崎康幸	十二
	十三
	十四
	十五
	十六
	十七
	十八
	十九
	二十
	二十一
	二十二
	二十三
	二十四
	二十五

荒魂之會

二十二年から
二十六年迄

の來歴

平成十三年四月
荒魂之會

一、本來歴には、平成八年四月刊の會報第八十三號に掲載した、荒魂之會二十一年の來歴以降の五箇年間の荒魂之會の全會合（他團體の會合への出席も含む）の摘要を記載した。

二、記載は概ね、月日、種別（内容）、會場、人數の順である。

三、定例の會場は、船橋市の中臺町會館である。定例の會場名の記載は變更の場合を除いて省略した。

四、内容欄の事項の太字の分は課題の書物の名稱である。内容欄末尾の記載事項は唱歌名である。

平成八年（第二十二年）

年間主題其の一・國書縱覽其の三・史書 其の二・樋口清之「日本人の歴史」を読む（續）會報・第八十二號、第八十三號（荒魂之會二十一年の來歴を掲載）第八十四號（物故諸先生尊名を謹載）第八十五號（卷頭に「奉祝伊勢の神宮御鎮座二千年」の章句を謹載、又、物故諸先生七十二名の哀悼の記事を「哀悼記」として再掲載）あらたま・第四十一號第四十二號 荒魂之會名簿（七月刊）

一月二十日（土）新年會（入谷から池端への散策並に第二十回連歌の會 一月一日） 鷗外莊 十二名（平山寛司、粉川宏氏他）

二月四日（日）合評會（あらたま第四十號 紀元節）八名

三月三日（日）研究會（史書を読む 仰げば尊し）八名

四月七日（日）研究會（日本人の歴史第三卷 牛若丸）物故諸先生を偲ぶ會（開會の辭、國歌齊唱、默禱、追悼の辭、獻詠

八村松先生和歌、獻杯、諸先生を偲ぶ、閉會の辭）九名

五月十九日（日）研究會（古事記 七里ヶ濱の哀歌）六名◎辰巳の森海濱公園に於る全國植樹祭に御臨席の兩陛下を奉仰し、國歌を齊唱す。

六月二日（日）研究會（古語拾遺 夏は來ぬ）七名

七月七日（日）合評會（あらたま第四十一號 敦盛と忠度）九名

九月一日（日）研究會（日本人の歴史第四卷 荒城の月）八名

九月二十七日（金）昭和天皇を偲び奉る月見の會 百花園 六名

十月六日（日）研究會（大鏡 庭の千草）八名

十月二十日（土）編輯會 四名◎地久節につき國歌を齊唱す。

十一月十七日（日）研究會（愚管抄 明治節）十名◎鑑賞會（荒魂之會由縁の音聲並に映像・平曲、福田恆存講演第一輯、

世界の中の君が代日の丸、パール博士）九名

十二月十五日（日）研究會（神皇正統記 天長節）八名

平成九年（二十三年）

年間主題其の一・花鳥風月の日本人 其の二・樋口清之「日本人の歴史」を読む（續）會報・第八十六號（二月刊、卷頭に「奉祝・獨立恢復四十五周年 平成九年四月二十八日」の章句を記載）第八十七號（四月刊、「日本の正氣恢復の爲に 獨立恢復四十五周年に關する荒魂之會提言」を掲載）第八十八號（七月刊、卷頭に「謹告・獨立恢復四十五周年記念昭和天皇を偲び奉る會 九月二十七日 中臺町會館」の章句を謹載）第八十九號（十月刊、紙碑其の四・吉澤正晶、落合欽吾、太田青兵、岩下保、樋口清之、田邊宏六先生の追悼記を掲載）あらたま・第四十三號第四十四號

一月十一日（土）新年會（隅田川周邊の散策並に第二十一回連歌の會 一月一日） 濱離宮庭園内芳梅亭 十名（粉川宏氏他）

二月二日（日）合評會（あらたま第四十二號 紀元節）九名

三月二日（日）研究會（續日本國の研究）の討論 古今和歌集選歌 さくら）十二名（中村信一郎、鈴木敏男氏他）

四月六日（日）研究會（日本人の歴史第五卷 さくら）故樋口清之先生を偲ぶ會（默禱、獻杯、樋口先生を偲ぶ）九名

四月二十七日（日）皇居周邊散策（尙藏館「横山大觀の世界」拜觀他）主權恢復記念國民大會（乃木神社尙武館）九名

五月十八日（日）研究會（國民性十論 後撰和歌集選歌 茶摘）八名◎兩陛下南米行幸啓を御見送り奉って國歌を齊唱す。

五月二十四日（土）江ノ電沿線散策（稻村ヶ崎他）第二十回あらたま懇談會（太田絢子女史）鉢の木 七名

六月一日(日) 研究会(櫻史 夏は來ぬ) 九名

七月六日(日) 研究会並に合評會(松と日本人 あらたま第四十

三號 海ゆかば) 九名

七月十三日(日) 築地周邊散策(築地一帯、尙藏館展拜觀、靖國

神社みたままつり參拜) 七名(平山寛司氏他)

八月二十五日(月) 二十六日(火) 遠野・平泉方面散策(一泊二

日・遠野郷八幡宮、中尊寺、毛越寺他) 十二名(佐藤茂氏他)

九月七日(日) 研究会(日本人の歴史第六卷 金剛石) 九名

九月二十七日(土) 獨立恢復記念昭和天皇を偲び奉る會(○皇居

遙拜並に尙藏館展拜觀 七名○第一部(國歌齊唱、昭和天皇御

製奉詠、「昭和天皇」ビデオ、録音「戰艦大和の號砲」、獨立恢

復四十五周年に關する荒魂之會提言朗讀) 第二部(昭和天皇を

偲び奉る、唱歌「金剛石」、聖壽萬歲) 十名(富士信夫氏他)

十月五日(日) 研究会(竹と日本人 大くさま) 御嶽神社 八名

十月二十六日(日) 先儒參列並に回向院參拜(大塚先儒墓地、

斯文會議堂) 記念講演、吉田松陰、橋本景岳兩先生墓所) 七名

十一月十六日(日) 研究会(日本の美術史 拾遺和歌集選歌 明

治節) 十名

十二月十四日(日) 研究会(日本人とすまい 天長節) 九名

十二月二十三日(火・祝) 天長節參賀並に靖國神社參拜 六名

平成十年(第二十四年)

年間主題其の一・國書縱覽其の四・近世の隨筆 其の二・樋口清之「日本人の歴史」を読む(續) 會報・第九十號(二月刊、卷頭に「平成十年・豐太閣薨去四百周年、古事記傳完成二百周年、明治維新百三十周年」の章句を記載。又、本號より荒魂之會調査を其の八迄掲載) 第九十三號(十月刊、「座談會・福田恆存回顧の舞臺」を掲載) あらたま・第四十五號第四十六號 荒魂之會名簿 一月十日(土) 新年會(小石川周邊の散策) 八次、景山直治先生の御遺宅を訪問す 並に第二十二回連歌の會 一月一日 六義園内心泉亭 十名(粉川宏氏他)

二月八日(日) 合評會(あらたま第四十四號 紀元節) 九名

三月一日(日) 研究会(○昴觀劇座談會○江戸名所圖會 早春賦

○四名○九名

四月五日(日) ○隅田川周邊散策(水上バスに乘船) ○研究会

(風雅の追憶の座談會 四條噺) ○八名○一名○二名(十一名)

四月二十六日(日) ○孔子祭(湯島聖堂) 參列 ○三田方面散策

(尙藏館展拜觀 泉岳寺、高輪大木戸蹟、他) ○八名○六名

五月十七日(日) 研究会(日本人の歴史第七卷 後拾遺和歌集選

歌 牛若丸) 八名○兩陛下歐洲行幸啓を御見送り奉つて國歌を

齊唱す。

六月七日(日) 研究会(駿臺雜誌 水師營の會見) 十一名

六月二十八日(日) 早稻田方面散策(尙藏館展、寶祥寺) 八故松田

福松先生墓參(他) 並に論語講座(宇野精一先生) 出席 五名

七月五日(日) 研究会並に合評會(南留別志 あらたま第四十五

號 海) 九名

八月三十日(日) 明治天皇行幸碑巡拜其の一(縣廳前他) 五名

九月六日(日) 研究会(日本人の歴史第八卷 俳諧の花鳥風月の

選歌 廣瀬中佐) 八名

十月四日(日) 研究会(常山紀談 庭の千草) 御嶽神社 十名

十月二十三日(金) 二十五日(日) 奈良方面散策(山邊道、正

倉院展、奈良公園) 二泊三日) 十三名(佐藤茂、田口義昌氏他)

十一月一日(日) 研究会(筆のすさび 金葉和歌集選歌 明治節

十名

十一月十四日(土) 大磯方面散策(尙藏館展、大磯) 鴨立庵他

○故福田恆存先生五回忌に當り妙大寺に當り福田家を弔問す。 九名

十二月十三日(日) ○研究会(羈旅漫錄) ○御即位奉祝十年の夕

(國歌齊唱、奉祝言上、御製奉詠、ビデオ視聽「天皇皇后兩陛下

國民と共に」「皇后陛下・子供時代の讀書の思い出」(和英兩語、

奉祝乾杯、唱歌天長節、聖壽萬歲) ○九名○十名

平成十一年(第二十五年)

年間主題其の一・近代の名著を讀む 其の二・樋口清之「日本人の歴史」を讀む(續) 會報・第九十四號(二月刊、卷頭に「平成十一年・靖國神社御鎮座百三十年周年、大日本帝國憲法發布百十年」の章句を記載) 第九十五號(四月刊、卷頭に「平成十一年四月十日 奉祝・御大婚四十周年」の章句を謹載) 第九十六號、第九十七號(十月刊、荒魂之會調査其の八(終了)の掲載) あらたま第四十七號第四十八號 合本愛誦詩歌文章撰・大八洲(四月刊、百二十六頁、千部 題字・景山ふみ刀自) 緊急提言・國歌君が代の歌詞の護持を望む(七月刊、七百五十部) 新紙幣二千圓札の發行に斷乎反對す(十一月刊、七百五十部)

一月九日(土) 新年會(市川柴又周邊の散策並に第二十三回連歌の會 一月一日) 川甚 十一名(粉川宏氏他)

二月七日(日) 合評會(あらたま第四十六號 紀元節) 十名
三月七日(日) 研究會(アランの教訓をめぐる座談會) 大八洲の校正 濱邊の歌) 〇七名 〇二名(九名)

四月四日(日) 研究會(日本人の歴史第九卷 故郷) 〇大八洲刊行記念會(國歌齊唱、乾杯、款談、收載作品の朗誦) 九名

五月二日(日) 野田方面散策(尙藏館展、鈴木貫太郎記念館) 五名
五月十六日(日) 研究會(新編歴史と人物 詞花和歌集選歌 大八洲の朗誦 櫻井の訣別) 九名

六月六日(日) 研究會(日本文化史研究 大八洲の朗誦 夏は來ぬ) 七名

六月十二日(土) 「空騒ぎ」の觀劇(五名) 並に尙藏館展拜觀(四名)
七月四日(日) 研究會並に合評會(南方熊楠隨筆集 あらたま第四十七號 大八洲の朗誦 ふじの山) 九名

七月十日(土) 佐原方面散策(佐原公園、伊能忠敬記念館他) 五名
八月八日(日) 館山方面散策並に多田顯先生邸訪問 三名

八月二十九日(日) 明治天皇行幸碑巡拜其の二 四名
九月五日(日) 研究會(日本人の歴史第十卷 大八洲の朗誦 里

の秋) 八名(佐竹義宣氏他)

十月三日(日) 研究會(二千五百年史 大八洲の朗誦 燈臺守)

御嶽神社 〇地久節(十月二十日) を奉祝して國歌を齊唱す。
會報第九十七號に謹載の御歴代御製を奉詠し、以後定例とす。

十月十日(日・祝) 靖國神社參拜並に神田方面散策(尙藏館展) 三名
十月二十四日(日) 先儒祭(大塚先儒墓地) 參列並に池袋線沿線(牧野記念庭園、野火止用水、平林寺) 四名

十一月七日(日) 研究會(長安の春 千載和歌集選歌 大八洲の朗誦 明治節) 七名 〇御即位十年奉祝式典に唱和して國歌を齊唱す。 〇緊急提言・新紙幣二千圓札の發行に斷乎反對すを朗讀す。

十二月十二日(日) 研究會(東洋文明史論 大八洲の朗誦(終了) 天長節) 九名 〇天長節を奉祝して國歌を齊唱す。

平成十二年(第二十六年)

年間主題其の一・三島由紀夫「豐饒の海」再讀 其の二・樋口清之「日本人の歴史」を讀む(續) 會報・第九十八號(二月刊、卷頭に「平成十二年・日本海海戰勝利九十五周年、鐵道唱歌上梓百周年、「私の國語教室」刊行四十周年、三島由紀夫歿後三十周年)の章句を記載。 第九十九號、第百號(七月刊、會報あらたま百號に寄せて) 〇中脩、岡田則夫、關正臣三氏(〇)を掲載) 第百一號(十月刊、座談會・最近の昂の舞臺を掲載) あらたま・第四十九號第五十號(二十五年記念號) 緊急提言・英語第二公用語化の企圖に斷乎反對す(三月刊、千部) 荒魂之會名簿(七月刊)

一月八日(土) 新年會(新春歌舞伎鑑賞 兩國方面散策 第二十四回連歌の會 一月一日) 百花園 十一名(田口義昌氏他)

二月六日(日) 合評會(宮中歌會始御儀の録畫映像鑑賞 あらたま第四十八號 紀元節) 八名(佐藤雅喜氏他)

二月二十六日(土) 鎌倉方面散策(杉本寺、青砥藤網邸蹟、十二所神社、東慶寺八太田青丘小林秀雄兩先生墓參) 四名

三月十二日(日) 研究會(〇昂觀劇座談會 〇東西の思想闘争 鐵道唱歌其の一) 御嶽神社 〇四名 〇八名 〇緊急提言・英語第二公用語化の企圖に斷乎反對すを朗讀す。

四月九日(日) 研究会(日本人の歴史第十一卷 鐵道唱歌其の二) 八名

四月二十二日(日) 山梨縣方面散策(三島由紀夫文學館他) 八名

五月十四日(日) 研究会(春の雪 新古今和歌集選歌 鐵道唱歌 其の三) 九名

五月二十七日(土・海軍記念日) 横須賀方面(記念艦三笠に於る 日本海海戦九十五周年記念式典に参列) 六名(笹目善一郎、古賀俊昭氏他)

六月四日(日) 研究会(奔馬 鐵道唱歌其の四) 八名

六月四日(日) 研究会(奔馬 鐵道唱歌其の四) 八名

七月二日(日) 研究会(合評會(曉の寺 あらたま第四十九號) 八名

七月二日(日) 研究会(合評會(曉の寺 あらたま第四十九號) 八名

御歌の奉詠であつた。七月の唱歌は中止した。

七月二十五日(火) 香淳皇后御大葬(皇居前竝に豊島ヶ岡齋場に於て拜禮をす。) 五名

於て拜禮をす。) 五名

あらたま 第十六回以後詠草

自第十六回至第二十五回 平成十三年四月

第十六回 平成四年一月十二日(日)

會場 川甚 出席者 十三 句數 十八

初春に柴又めぐる有難さ(千葉)

矢切の渡鷗群ゐて

この年も一人窗邊に春の空

河原の凧の敷を敷へて

江戸川の水面に映る月寒く

祭ばやしに杯を重ねて

獅子舞を乙女が踊るあでやかさ

人磨像も共に見惚れて

風そよぐ野菊のごとき君なりき

老い松の邊にしはし行む

あらたま 第十六回以後詠草

自第十六回至第二十五回 平成十三年四月

第十六回 平成五年一月十日(日)

會場 多可良園 出席者 十二 句數 十八

あらたまの年を迎へて御婚約(高池)

ひとときは映えて北齋の富士

七月二十九日(土) 横濱方面散策(岡倉天心生誕の地碑他) 竝に 舞岡八幡宮参拜(關正臣宮司の講話) 四名

八月二十六日(土) 木更津方面散策(八劍八幡神社他) 六名

九月三日(日) 研究会(天人五哀 鐵道唱歌其の五) 八名

十月一日(日) 研究会(豐饒の海全四卷讀了の座談會 鐵道唱歌 其の六(終) 御嶽神社 八名

十月十四日(土) 〇川越方面散策(角山素天翁邸訪問) 〇六名 〇五名

十一月五日(日) 研究会(日本人の歴史第十二卷(終了) 新救撰 和歌集選歌 明治館) 八名

十一月二十五日(土) 〇目白市ヶ谷方面散策(學習院、塙保己一 墓所、陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地正門、尙藏館展) 〇憂國忌(九 段會館) 参列 〇六名 〇七名

十二月十日(日) 研究会(小説とは何か) 八名

節竝に國歌齊唱は香淳皇后追慕の時を畏み中止す。

くだかけの聲をはやしと聴きしあと

名残り惜しみて門口に立つ

打水に若朝顔も首振りぬ

虹も飛脚も走つて消える

草刈の研鎌を腰は父祖譲り

五族協和を夢に見し日よ

秋の夜は秋の垣根を辿りゆき

齊唱一瞬聖なる調べ

樺太ゆ飛び來る雁の高鳴きて

夕焼け小焼村の坂道

春むすび今日の宴はたから園

遷宮祝ふふみぐらの旅

第十八回 平成六年一月九日(日)

會場 清澄庭園涼亭 出席者 十四 句數 十八

獨世に清く澄みたる初日影(竹内)

獨世に清く澄みたる初日影(竹内)

獨世に清く澄みたる初日影(竹内)

獨世に清く澄みたる初日影(竹内)

獨世に清く澄みたる初日影(竹内)

獨世に清く澄みたる初日影(竹内)

松の梢は雪降積みて

少年の日は永くして萬華鏡

路地の小店の賑ひの中

二人づれ月天心の寒さ哉

夜鳴蕎麥屋の湯氣立のぼる

大川の橋の狹霧に女人待ちて

湯に身籠れる優し狼

梅の香や萬の春にさきがけて

伊勢の御社あらたまるらむ

悠紀主基の稻穂ばかりは頭垂れ

恵比壽顔にて菓を打つなり

細川の月も程なく雲がくれ

櫻田門の花を待たなむ

ふみぐらの實り清けき今日の春

清澄庭園草の芽白し

幾山河紅緒の下駄の道一つ

こぞりて集ふあらたまの友

第十九回 平成七年一月八日(日)

會場 涵徳亭 出席者 十五 句數 十八

松の内友と酒酌む夕かな(前川)

涵徳亭に二萬歩歩みて

漱石の由縁はいづこ錦華小

地球儀の瑕青春の傷

八日月我にもあらぬもの思ひ

あけぼのすぎの天に聳りて

寒櫻雲一つなき空の色

語る言の葉海鳴に消ゆ

永田町明日の風はとほのきて

身を火に投げてもてなす甕

古里の山田は荒れて草生ひぬ

嫁とり急げ丈夫の友

なよ竹に親し身寄するおもかげや

はるかに高き沖つ白波

滿蒙もブラジルも今年表に

父兄征きて去年は五十年

肩上げて共に語らん花の宵

古來稀なる齡重ねて

第二十回 平成八年一月二十日(土)

會場 鷗外莊 出席者 十二 句數 十四

とけかかる霜を踏みしめ初詣(平山)

湯島の坂に振袖の舞ふ

文づかひ池のほとりに居を構へ

天下の事は夢のまた夢

月明し老櫻仰ぐ人一人

白地に赤く朱鷺の島なり

あれこれと裏地を選ぶ呉服店

主の知らぬ今日のひととき

心頭に怒り發する朴念仁

風俗文學フーズクとなる

札束を載せてするがの鸚鵡鳴く

父なし母なし養蟲あはれ

報恩の「けさ」はひらりと明日の月

鷗外莊にあらたに集ふ

第二十一回 平成九年一月十一日(土)

會場 濱離宮庭園内芳梅亭 出席者 十

句數 十六

初空や豊葦原に潮入りて(市川)

黄金に映ゆる鴨の一群

隅田川十三橋を舟下り

江戸の名残りがビルの谷間に

月明に赤子の手足のびてゆけ

越後の海に蟹を求めて

良寛坊毬をつく手がふと狂ひ

時を隔てておろしやの船

椿咲く恩賜公園長閑にて

枝折戸叩く人影は誰

獅子頭外せば微笑むをみなへし

ドナウが青く見ゆるのが戀

潮遠く昔日偲ぶ濱御殿

花咲く春は謎の石柱

松ヶ枝も齡重ねて三百年

壯士行き逝く國の内外

第二十二回 平成十年一月十日(土)

會場 六義園内心泉亭 出席者 十 句數

十八

初春の還曆祝ひ雪見酒(伊東)

いにしへびとのゆかりの町に

さいかちの土物店も碑となりて

南北線に鐵の潛り戸

月花にしはし佇む妹背道

お七演歌のトラックが行く

兩替の門に群がる人の波

桁數増えてふるさと遠く

椿落つ一人眺むる今朝の庭

千島の果てよ重藏あはれ

世を忍び散華の戀の墓参り

衣袋の腹の雪の紫

寶船財の一字に目が眩み

夜寒に聞こゆ猫の鳴聲

武藏野ははや梢迄色づきて

椎の實拾ふ手の影長し

ブリテンの地にありて偲ぶ秋の月

六草の園に居群し子等は

第二十三回 平成十一年一月九日(土)

會場 川甚 出席者 十一 句數 十二

依代は松か賢木か初詣(加藤)

火焚のまどるいつ果てもせず

黃門も首を傾げし藪知らず

働く人は皆異邦人

月天心からめき川に舟一つ

忍ぶ棹先道行の夢

餅を搗く姿も見えず春臘

綠蔭つれづれ乳呑子の頬

川の邊の野菊の如き君となるらむ

眼元涼しき今朝の獅子舞

蟲麻呂が尋ねし乙女何處にや

遠く世に聞く尼寺の蹟

第二十四回 平成十二年一月八日(土)

會場 百花園 出席者 十一 句數 十八

雪降らぬ町で幾度干す屠蘇ぞ

橙似合ふは朝日か夕日か

初春の雲の果てまで親子鷹

利根の岸邊に寄る渡舟

十六夜の數を唱へし窗邊には

城の白壁光流るる

雨上り祭囃子に山車を追ふ

娘若衆ふと眉を上げ

辨慶の涙下るや初舞臺

夫婦煙管の逢方もなし

鳩歩む遊びの園の土優し

たけくらべせし子等はいづこに

月影に罷り出でたる猫の聲

螢を集め古き文讀む

山の邊の紅葉降りし去年の旅

飛行機雲の消えゆくところ

梅開き櫻も急ぐ季の盛り

逸事懐し百の花園

第二十五回 平成十三年一月十三日(土)

會場 關口芭蕉庵 出席者 十二 句數 十六

十六

木枯の抜けてまぢかき扉かな(田口)

孫生え残る葛飾の里

釜焚きに我も我もと走り寄り

あらたま連歌の會第十六回以降第二十五回迄の出席者一覽(平成四年〜平成十三年)

出席者 佐藤亮策、平山寛司、駒井鐵平、川畑賢一、千葉展正、中澤伸弘、前川孝志

高崎一郎、清水明彦、竹内孝彦、根岸清文、大橋伊佐男、角山正之、粉川宏

田口義昌、高池勝彦、市川靜夫、佐藤利幸、齋藤景、小川榮太郎、伊東康夫

小澤泰裕、加藤征司、佐竹義宣、土田龍太郎(二十五名)

註・各氏名の太字の一字は出席一覽表の氏名略記の文字符を示す

火吹き男におかめの踊り

秋風に孫をあやすや笛の聲

白き月なり涙ぐむなり

龜戸は弟橘の御社

裏の藪にはかたつむりかな

清春の櫻木の間に富士を見つ

白雪を愛で酒を酌むかな

御母の思ひの文は小袖にて

面影似たる人を戀ふかな

をとめごのほほ赤らめしかるた取り

そぞろ歩きは雜司が谷道

命名は大江戸線と洒落てみる

たつきのあとは庵とならむ

回数	佐平	駒川	千中	前高	清内	根大	角粉	田池	市藤	齋小	伊澤	加竹	土
十六	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
十七		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
十八		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
十九		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二十		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二十一		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二十二		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二十三		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二十四		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
二十五		○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

荒魂之會

二十七年から
三十一年迄

の來歴(一)

平成十八年二月
荒魂之會

一、本來歴には、平成十三年四月刊の會報第百三號に掲載した、荒魂之會二十二年から二十六年迄の來歴以降の五箇年間の荒魂之會の全會合(他團體の會合への出席も含む)の摘要を記載した。

二、記載は概ね、月日、種別(内容)、會場、人數の順である。

三、定例の會場は、船橋市の中臺町會館である。定例の會場名の記載は變更の場合を除いて省略した。

四、内容欄の事項の太字の分は課題の書物の名稱である。内容欄末尾の記載事項は唱歌名である。萬葉集輪讀他、定例の分は省く。

平成十三年(第二十七年)

年間主題其の一・儒佛を讀む 其の二・萬葉集輪讀其の一・會報第百二號(二月刊、卷頭に、平成十三年・昭和天皇御生誕百周年、『私の漢字教室』刊行四十周年、あらたま刊行二十五周年)の文言を記す。第百三號(四月刊、卷頭に「豫告・あらたま刊行二十五周年記念懇親會 期日・十月二十七日(土) 會場・東京都内」の文言を記す。荒魂之會二十二年から二十六年迄の來歴を掲載)第百四號(七月刊、卷頭に「奉悼・ネパール王國に於る王室の御不幸の際會に當り、王室並に國民に對して、謹しみて哀悼の意を表し奉る。平成十三年七月一日 荒魂之會」の弔詞を記す。又、物故諸先生十四名の哀悼の記事を「續哀悼記」として再掲載)第百五號(十月刊、「同人座談會・回顧と展望と」を掲載)あらたま・第五十一號第五十二號 日本正氣恢復の爲に・荒魂之會提言並に調査(五月刊、B五判二十四頁、三百部 題字・片岡正彦)

一月十三日(土) 新年會(尚藏館展拜觀、能樂鑑賞、龜戸方面の散策)第百二十五回連歌の會(唱歌は香淳皇后崩御に鑑み中止す)

關口芭蕉庵 〇七名 〇十二名(粉川宏、土田龍太郎氏他)

二月四日(日) 合評會(あらたま第五十號 紀元節) 九名

二月十日(土) 靜岡方面散策(丸子宿、登呂遺蹟他) 十名

三月四日(日) 座談會(あらたま刊行二十五周年 廣瀬中佐) 七名

四月一日(日) 座談會(道 天皇陛下の御聖徳を仰ぐ 牛若丸) 八名

〇座談會の内容に關して平成十三年歌會始御儀の録畫を拜見す。

五月十三日(日) 研究會(儒教思想 とんび) 八名

六月三日(日) 研究會(大學 夏は來ぬ) 九名

七月一日(日) 研究會並に合評會(中庸 あらたま第五十一號 海) 九名(ネパール王國王室の御不幸に當り默禱を捧ぐ。

八月十七日(金) 十八日(土) 三島伊豆方面散策(一泊二日・三嶋大社、吉田松陰寓寄處、須崎、他) 九名(田口義昌氏他)

九月二日(日) 研究會(論語新釋 里の秋) 九名

十月十四日(日) 〇論語講座(宇野精一先生) 目白學藝院 六名

〇懇親會の準備會(箱根八里) 八名 〇地久節奉祝の國歌を齊唱す。

十月二十七日(土) あらたま刊行二十五周年記念懇親會(國歌齊唱、活動報告、實踐報告、講評・高池勝彦、林田孝兩氏、祝辭

・萩野貞樹、古賀俊昭兩氏、記念品贈呈・宮坂健三氏、卓話・笹目善一郎、郡順史、土田龍太郎、落合夏樹、角山素天五氏、祝賀演目・和歌朗詠、劍武、唱歌箱根八里) 芝彌生會館 二十四名

〇終了後、大磯の妙大寺福田家墓所に詣づ。 六名

十月二十八日(日) 上野、皇居、目黒方面散策(聖徳太子展他) 四名

十一月十八日(日) 研究會(孟子 明治節) 八名

十二月一日(日) 研究會其の一(般若心經金剛般若經) 五名

十二月十六日(日) 研究會其の二(勝鬘經義疏 天長節) 七名

平成十四年(第二十八年)

年間主題其の一・國書縱覽其の五・藝能 其の二・萬葉集輪讀其の二 會報・第百六號(一月刊、卷頭に「平成十四年奉祝・明治天皇御生誕百五十周年・主權恢復五十周年・沖繩縣本土復歸三十周年・今上陛下古稀八數へ七十の賀」の章句を謹載。第百七號(四月刊、子供は何が教へられてゐないか(國語國史の常識の恢復の爲に)主權恢復五十周年に關する荒魂之會提言(別刷五百五十部)並に調査・全國六十三日刊紙に於る平成十四年歌會始の御儀の記事の實態を掲載)第百八號、第百九號(十月刊、同胞各位に訴へ

る・續の一教養の衰頹を坐視する事勿れ八別刷五百五十部ノ東西南北其の一・静岡新聞、第二十一回あらたま懇談會大要小出昌洋氏に伺ふ森銚三翁逸事八全四回・其の一ノを掲載）あらたま・第五十三號第五十四號 荒魂之會名簿（七月刊）

一月十二日（土）新年會（一佃、月島方面散策、落語鑑賞、尙藏館展

◎第二十六回連歌の會 一月一日）美濱園松籟亭（一）各八名

二月三日（日）合評會（あらたま第五十二號 紀元節）九名

◎平成十四年歌會始御儀の録畫を拜見し、以後二月の定例とす。

二月二十三日（土）四谷方面散策（尙藏館展他）並に文樂鑑賞 十名

（土谷まつ江、小林きく江、青木廣子刀自他）

三月三日（日）研究會（喫茶養生記 仰げば尊し）四名

三月九日（土）鹿島神宮（祭頭祭）香取神宮巡拜 四名

三月三十一日（日）◎大磯方面散策（嶋立庵・西行祭、福田恆存

先生御遺邸弔問）◎落合欽吾先生御遺邸弔問（一）三名（二）二名

四月七日（日）研究會（本居宣長 春の小川）七名◎主權恢復五

十周年奉祝の國歌を齊唱す。

四月十三日（土）◎第二十一回あらたま懇談會（小出昌洋氏）芝

彌生會館 八名◎芝方面散策（増上寺、尙藏館展他）七名

四月二十九日（月・祝）◎明治神宮舞樂拜觀◎皇居方面（一）四名（二）三名

五月十二日（日）研究會（風姿花傳 鎌倉）七名

六月二日（日）研究會（曾根崎心中他 金剛石）六名

六月十四日（金）十五日（土）十八日（日）二泊三日（車中一、京都一）

◎京都散策（北野天滿宮、桃山御陵他）◎第三回關西懇談會（唱歌

金剛石）ウオジ苑 ◎角田文衛先生邸訪問（一）各十一名（二）四名

七月十三日（土）◎合評會（あらたま第五十三號 我は海の子）

◎みたままつり参拜（遊就館展拜觀）◎六名 ◎七名

◎兩陛下中東歐行幸啓の平安を祈念して國歌を齊唱す。

九月一日（日）研究會（默阿彌名作選 赤とんぼ）七名

十月十三日（日）研究會（日本藝能史六講 元寇）七名◎會報に

掲載の同胞各位に訴へる・續の一（第八十一回昭憲皇太后基金

收益配分先一覽を併載）を朗讀す。◎地久節奉祝の國歌を齊唱す。

十一月十七日（日）研究會（怪談牡丹燈籠 明治節）八名

十一月三十日（土）校正會 小林秀雄全集附録の音盤を聴く。

六名◎高松宮殿下の薨去に黙禱を捧ぐ。

十二月十五日（日）研究會（團碁の世界 天長節）八名（中山典

之氏他）◎天長節奉祝の國歌を齊唱す。

十二月二十三日（月・祝）天長節参賀並に御陵巡拜（参賀、靖國神

社、武藏野御陵、多摩御陵他）七名（桑原草子女史他）

荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴 (二) 平成十八年四月
平成十五年 (第二十九年)

年間主題其の一・國史の中の女性 其の二・萬葉集輪讀其の三
會報・第百十號 (二月刊、卷頭に「奉祝・御即位以來十五年」の
賀詞を謹載す。) 第百十一號 (四月刊、同胞各位に訴へる・續の
二同胞感の涵養の源泉を涸渇させる事勿れ! 我々は何處にあるの
か! 別刷五百五十部) 並に調査・日刊紙、二十四紙に於る平成十五
年歌會始の御儀の記事の實態を掲載す。第百十二號、第百十三號
(十月刊、御即位以來十五年奉祝御文業謹抄並に第八十二回昭憲
皇太后基金收益配分先一覽、東西南北其の二・茨城新聞を掲載す。)
あらたま・第五十五號、第五十六號

一月十二日 (日) 新年會 (○皇居から上野への散策) 第二十七回
連歌の會 一月一日 笹乃雪 十二名 十名 御即位以來
十五年奉祝の歌仙であつた。

二月二日 (日) 合評會 (あらたま第五十四號 紀元節) 故三
瀧信吾先生を偲ぶ會 (默禱、三瀧先生和歌奉詠、獻杯) 七名

二月十日 (月) 十一日 (火・祝) 夜行日歸り 飛鳥方面散策
(神武天皇御陵、橿原神宮(紀元節祭) 十三名 (佐々木秀信氏他)

三月九日 (日) 研究會 (草花の匂ふ國家 鐵道唱歌第二集) 四名
○天皇陛下の御快癒を奉祝して國歌を奉祝す。

三月二十三日 (日) 例會の其の二 (○豪徳寺 (樋口清之先生七回忌
の墓參)) 京王プラザホテルのいけばな大東京展の鑑賞 四名

四月十三日 (日) 研究會 (萬葉の女人たち 鐵道唱歌第二集)
○故關正臣先生を偲ぶ會 (默禱、關先生和歌奉詠、獻杯) 六名

○同胞各位に訴へる・續の二を朗讀す。

五月十日 (土) 研究會 (十六夜日記 鐵道唱歌第二集) 六名

六月八日 (日) 研究會 (平家後抄 鐵道唱歌第二集) 六名
○皇太子同妃兩殿下御成婚十周年を奉祝して國歌を齊唱す。

七月六日 (日) 合評會 (あらたま第五十五號 鐵道唱歌第二集)
七名 福田恆存を語る夕第一夜 八名 (渡邊建、土井義士氏他)

七月二十日 (日) 例會の其の二 (○國學院大學公開古典講座 (萬葉
集・源氏物語) 澁谷近邊の散策 (塙保己一像他) 四名

八月二十三日 (土) 二十四日 (日) 泊二日 (仙臺泊) (○仙臺松島方面
(多賀城蹟、昭和天皇御製碑、明治天皇御小休所蹟、仙臺城址、武
隈の松他) 第二十二回あらたま懇談會 (久保忠夫氏 荒城の月)

法華クラブ仙臺 (○大沼英太郎先生御遺邸弔問) 六名 (七名) 五名

九月七日 (日) 研究會 (戰記物語の女性 鐵道唱歌第二集) 六名

十月五日 (日) 研究會 (○とも風土記・母の手毬歌 鐵道唱歌
第二集) 道人庵 六名 (○福田恆存を語る夕第二夜 黒潮 七名

○地久節 (十月二十日) 奉祝の國歌齊唱をす。

十月二十六日 (日) 大塚方面散策 (先儒祭參列、尙藏館展、雜司ヶ谷
靈園、護國寺、講談社野間道場) (○佐竹義宣氏の御案内) 六名

十一月十六日 (日) 研究會 (○桃山時代の女性 明治節) 五名

十一月二十九日 (土) 校正會 五名 (○正倉院展鑑賞を拜見し定例とす。

十二月十四日 (日) 研究會 (○暮末明治女百話) (○御即位以來十
五年奉祝の夕 (國歌齊唱、奉祝言上、御文業拜讀、映像「皇室
と日本人―現代に生きる日本の心」拜見、奉祝乾杯、唱歌天長
節齊唱、聖壽萬歳) 七名

平成十六年 (第三十年)

年間主題其の一・外國人の日本論 其の二・萬葉集輪讀其の四

其の三・荒魂之會回顧 會報・第百十四號 (二月刊、卷頭に「豫
告・少年讀本刊行二十五周年記念懇親會 期日・十一月三日 (水・祝)

會場・東京都内」の文言を記し、春夏秋冬欄に「福田恆存を語る
夕への御案内」を掲載す。前年十二月に開催した御即位以來十五
年奉祝の夕の奉祝言上(八要旨)を掲載す。第百十五號 (四月刊、

同胞各位に訴へる、續の三國語國史國文學ではないのか一國語の
作法を破擯する事勿れ! 別刷五百五十部) 並に調査・日刊紙二十
四紙に於る平成十六年歌會始の御儀の記事の實態を掲載す。東西

南北其の三・長崎新聞を掲載す。第百十六號 (七月刊、尙藏館
逍遙欄を新設す。少年讀本刊行二十五周年記念懇親會の案内記事

を掲載す。○第百十七號（十月刊、紙碑其の五・阿部正路、平林孝、關正臣、三瀧信吾四先生の追悼記並に第八十三回昭憲皇太后基金収益配分先一覽を掲載す。）あらたま・第五十七號第五十八號（第五十八號より井上雅夫氏揮毫の新題字）荒魂之會名簿（七月）

一月十一日（日）新年會（○東海道行脚第一歩八日本橋から新橋迄）

○八名 ○十名（土田龍太郎、粉川宏氏他）

二月一日（日）合評會（あらたま第五十六號 紀元節）七名

二月二十二日（日）○佐藤亮策先生十三回忌の墓參（○國學院大學多摩プララザ校舍萬葉の小徑散策）○白學藝院孟子講座（宇野精一先生）○二名 ○三名 ○二名

三月七日（日）研究會（校註祝詞、三代御製、偉人曆正續、最新日本史 鐵道唱歌第三集）六名

四月四日（日）研究會（ヨーロッパ文化と日本文化 鐵道唱歌第三集）四名 ○御大婚（四月十日）四十五周年を奉祝して國歌を齊唱す。○同胞各位に訴へる、續の三を朗讀す。

五月五日（水・祝）○三鷹府中方面散策（尙藏館展、禪林寺、大國魂神社へくらやみ祭）他 ○第二十三回あらたま懇談會（笹目善一郎氏 鯉のぼり）ホテルコンチネンタル ○六名 ○七名

五月十六日（日）研究會（大君の都 鐵道唱歌第三集）六名

五月二十三日（日）○靖國神社境内清掃奉仕 ○白學藝院孟子講

あらたま 第二十六回以後詠草 連歌の會

◇第二十六回から第三十回迄◇ 平成十八年四月

第二十六回 平成十四年一月十二日（土） 會場 美濱園松籟亭 出席者 九 句數 十八 初春のくるとの濱の入日かな（駒井） 梅の香たどる佃の小徑

座（宇野精一先生）六名 六月六日（日）研究會（シュリーマン旅行記清國・日本 鐵道唱歌第三集）六名

七月四日（日）○合評會（あらたま第五十七號 鐵道唱歌第三集）

○福田恆存を語る夕第三夜 ○六名 ○六名

八月五日（木）茶話會（郡順史氏）オアシス 五名

九月五日（日）研究會（ミカド 鐵道唱歌第三集）六名

十月十七日（日）○研究會（西歐の衝撃と日本 鐵道唱歌第三集）

○福田恆存を語る夕第四夜 ○六名 ○八名 ○地久節を奉祝して國歌を齊唱す。

十一月三日（水・祝）少年讀本刊行二十五周年記念懇親會（國歌齊唱、平成十六年歌會始録畫拜見、少年讀本刊行の経緯報告、實踐報告（唱歌・大八洲）款談（出席者全員による卓話）唱歌明治節）芝彌生會館 十九名（角山素天、清水潤子、落合夏樹氏他）

十一月三日（水・祝）彌生會館での懇親會終了後、逗子方面（六代御前の墓所）散策 八名（田口義昌氏他）

十一月十四日（日）研究會（日本の弓術 鐵道唱歌第三集）七名

十一月二十七日（土）校正會 三名

十二月十二日（日）○研究會（東京に暮す 天長節）○故石井勳先生を偲ぶ會（黙禱、獻杯、石井先生を偲ぶ）○八名 ○恒例の天長節奉祝の國歌齊唱は中止す。

にはか雨軒のしづくを手にかけて 首歩きする鳩は親子か 住吉の社の上に月さやか ともしびを伏す山吹の里 花の江戸振袖姿にひとり立ち 御百度を踏む子育地藏 花の下同窓會のあぶり出し 兔追ひしふるさとの山 健氣なる娘語りの門づけは

戀も知らずに文をのみ讀む 空を翔べまじなひの粉ふりかけて 栗毛の駒の嘶き高く 駿河路は眞白き富士の裾野にて 還曆祝ひ屠蘇を重ねつ 高殿の間に見ゆる月の影 松籟亭に唱歌の響き 第二十七回 平成十五年一月十二日（日） 會場 笹乃雪 出席者 十 句數 十六

十あまり五とせの御代壽がん (岡村)

根岸の里の笹雪とけて

芹なづな媪をとめと摘みにけり

たけくらべせしみどりごはいづこ

仰ぐれば雲一つなし晝の月

波のみ高し日本の海は

馬の耳に念佛しばしきれいな眸

故郷に戻りし大和撫子

かりがねも羽を休める夕餉かな

雲水も泣け縛めの日々

君ならで固き誓ひの草枕

どうぞ落ちたり蟬仰向けに

歌垣に心もはやる筑波道

峰より望む花つばきかな

この年も朋あり道をたづね來て

古稀還曆を祝ふ宴は

第二十八回 平成十六年一月十一日(日)

會場 神奈川近代文學館會議室 出席者

十句數 十六

濱風も枝を鳴らさで姫小松 (土田)

歩みも軽く宮にこぞりて

老いたるもうひやまを踏む梓弓

我遅れじと烟たなびけ

天照と呼ぶ地もありて古代月

君知らざるやものふの道

梅で飲む茶屋もあるべし駿河路は

廣重の繪の敷を重ねて

橋姫もつつじの花に身を代へて

木枯し寒く衣かたしき

今よりはおほみやしるに向ふらむ

逢瀬樂しきみなと横濱

飯を盛るおうなも共に喜びて

やんやと歌ふ唐人の館

讀本も二十五周年を數へたり

それぞれ盡せあらたまの道

第二十九回 平成十七年一月九日(日)

會場 蘆花恆春園 出席者 七句數 十

破魔弓の鈴の音うれし初詣 (根岸)

仰ぐ空には鷹の飛びゆく

紅梅のはや咲き初めし蘆花の園

今日より我も土にいそしめ

十六夜の残りの月を友にして

ここに眠るか六代御前

春おぼる枕にかをれ髪あぶら

昨日けふとは知らざるものを

行暮れて花をしるべの深山路に

浮舟若菜の源氏繪を見る

第三十回 平成十八年一月十四日(土)

會場 大磯宿國よし 出席者 八句數

十八

初詣神樂の翁餅まきて (角山)

人々の歩み心弾みて

雨降らぬ江の島の驛賑やかに

岩間に遊ぶ磯の白浪

秩父道田舎歌舞伎を垣間見て

月も朧に乙女子の聲

ひとり寝の春はいくとせ過ぎにけむ

判官殿をただに慕ひて

南天を花に代りて供へたり

蒙古の使ここに眠るや

夜に入りて思はぬ冬の嵐かな

戀し戀しと妻問の猫

街道の旅籠訪ねて日を巡り

鳴立庵は本日閉門

また來よと薄の招きに誘はれて

心にかかる大磯の濱

火を點せ天の呻きを仰ぎみん

みそとせ経たりあらたまのくわい

連歌の會第二十六回から第三十回迄の出席者

五回・小澤泰裕、加藤征司、角山正之、根

岸清文、駒井鐵平(五) 四回・前川孝志(一)

三回・粉川宏、土田龍太郎(二) 二回・田口

義員、岡村明人、市川静夫(三) 一回・伊東

康夫、中澤伸弘(二) 計十三名

例會記 平成十八年一月

一月・新年會

日時 一月十四日(土) 午前九時半から午

後七時迄 内容 〇史蹟散策 〇福田恆存

先生十三回忌の墓参 〇第三十回連歌の會

(會場・大磯宿國よし) 行程 東海道行

脚第三步・藤澤宿(常立寺、江の島他)

午後から荒天となり、豫定の平塚大磯行

脚は中止し藤澤驛で解散。福田家墓参並

に連歌の會の一行は電車で大磯驛に向ふ。

参加者 〇重田公平、小林きく江、土谷まつ江、

〇〇〇田口義員、中澤伸弘、加藤征司、

角山正之、駒井鐵平、小澤泰裕、根岸清文

〇〇土田龍太郎 唱歌・一月一日 發句・角山

新賛助會員 四月一日現在、百四十七名

田村貴佐映(東京都板橋區)

荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴 (三) 平成十八年七月
平成十七年 (第三十一年)

年間主題其の一・庭訓書を讀む 其の二・萬葉集輪讀其の五 其の三・荒魂之會回顧二 會報・第百十八號 (二月刊、卷頭に「平成十七年・日清戰爭終結百周年、日露戰爭終結百周年、大東亞戰爭停戰六十周年」の文言を記す。) 第百十九號 (四月刊、卷頭に「平成十七年、古今和歌集撰進千百周年、新古今和歌集撰進八百周年、私の國語教室刊行四十五周年、三島由紀夫歿後三十五周年」の文言を記す。調査・日刊紙二十四紙に於る平成十七年歌會始の御儀の記事の實態並に東西南北其の四・京都新聞を掲載す。) 第百二十號 (七月刊、同胞各位に訴へる續の四・何處の誰かが分らなくなる―これも國語の問題である) 別刷五百五十部を掲載す。第百二十一號 (十月刊、石井勳一周忌特輯記事並に第八十四回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。) 會報別號・廻燈籠其の一 (六月刊) あらたま・第五十九號第六十號 (三十年記念號) 要望書・政府開發援助等の國民負擔の實態の報道を望む (七月、全國六十一日刊新聞編輯局長各位宛)

一月九日 (日) 新年會 (○東海道行脚第二步 (品川宿) 他) 第二十九回連歌の會 一月一日 蘆花恆春園 〇六名 〇七名
二月六日 (日) 合評會 (あらたま第五十八號 紀元節) 六名
三月六日 (日) 研究會 (美しい日本の私 水師營の會見) 六名
三月十一日 (金) 十二日 (土) 十三日 (日) 二泊三日 (軍中泊 奈良泊 關西旅行 (○明石須磨、湊川、奈良八修二會) 京都八末慶寺、蘆山寺) 〇角田文衛先生邸訪問 〇五名 (井上雅夫氏他) 〇四名
四月十日 (日) 〇研究會 (新訂建武年中行事 電車唱歌) 〇六名

を語る夕第一夜 (別席・黒潮) 七名 〇御大婚 (四月十日) 四十六周年を奉祝して國歌を齊唱す。

五月八日 (日) 研究會 (庭訓往來 電車唱歌) 七名 〇兩陛下の歐洲行幸啓の平安を祈願して國歌を齊唱す。

六月五日 (日) 研究會 (武士の家訓 電車唱歌) 七名 〇兩陛下のサイパン島行幸啓の平安を祈願して國歌を齊唱す。

七月三日 (日) 〇合評會 (あらたま第五十九號 電車唱歌) 〇福田恆存を語る夕第五夜 六名 〇同胞各位に訴へる續の四並に全國日刊紙編輯局長宛の要望書を朗讀す。

七月十六日 (土) 日露戰爭勝利百周年記念巡拜 (町田市・村松嘉津先生墓參、明治神宮、東郷神社、乃木神社、皇居東御苑、靖國神社・みたままつり) 五名 〇荒魂之會獻燈を確認す。

七月三十一日 (日) 埼玉縣栃木縣方面散策 (鷲宮神社祭禮、足利市八饒阿寺、足利學校) 五名 (土田龍太郎氏他)

九月四日 (日) 研究會 (養生訓和俗童子訓 電車唱歌) 五名

十月十六日 (日) 〇研究會 (日本法律史話 電車唱歌) 四名 〇福田恆存を語る夕第六夜 (別席・黒潮) 四名 〇地久節奉祝の國歌を齊唱す。

十月二十九日 (土) 故石井勳先生一周忌の墓參 四名

十一月六日 (日) 〇研究會 (鳩翁道話 明治節) 〇故石井勳先生一周忌追悼の會 (默禱、追悼の辭、御遺著朗讀 獻杯) 四名

十一月二十六日 (土) 校正會 四名

十二月三日 (土) 秩父散策 (秩父神社祭禮他) 五名

十二月十一日 (日) 〇研究會 (家郷の訓 天長節) 〇大名を語る夕第二夜 (別席・黒潮) 五名 〇天長節奉祝の國歌を齊唱す。

荒魂之會

三十二年から
三十六年迄

の來歴(一)

平成二十三年二月
荒魂之會

一、本來には、平成十八年二月刊の會報第百二十二號に掲載した、荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴以降の五箇年間の荒魂之會の全會合(他團體の會合への出席も含む)の摘要を記載した。記載は概ね、月日、種別(内容)、會場、人數の順である。

二、定例の會場は、船橋市の中臺町會館である。定例の會場名の記載は變更の場合を除いて省略した。

四、内容欄の事項の太字の分は課題の書物の名稱である。内容欄末尾の記載事項は唱歌名である。萬葉集輪讀他、定例の分は省く。

平成十八年(第三十二年)

年間主題其の一・近世の諸學 其の二・萬葉集輪讀其の六、其の三・荒魂之會回顧三 會報・第百二十二號(二月刊、卷頭に、平成十八年・昭和天皇御生誕百五周年、『私の漢字教室』刊行四十五周年、あらたま刊行三十周年)の文言を記す。荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴(一)を掲載。第百二十三號(四月刊、卷頭に「豫告」あらたま刊行三十周年記念懇親會◇期日・十一月三日(金・祝)會場・東京都内)の文言を記す。荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴(二)並にあらたま連歌の會第二十六回以後詠草◇第二十六回から第三十回迄を掲載す。第百二十四號(七月刊、調査・全國二十四日刊紙に於る平成十八年歌會始の御儀の記事の實態、あらたま刊行三十周年記念懇親會案内の記事、荒魂之會二十七年から三十一年迄の來歴(三)を掲載す。第百二十五號(十月刊、同胞各位に訴へる續の五・何を言つてゐるのか分らなくなる一物の名を失はせる假名表記(別刷五百五十部)並に第八十五回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。會報別號・廻燈籠其の二(十二月刊)あらたま・第六十一號第六十二號 別冊あらたま其の九・風信帖(十月刊、A五判百二十四頁 三百部 題字・土谷まつ江) 荒魂之會名簿(七月刊)

一月十四日(土) 新年會(○)東海道行脚第三步(藤澤宿) (○)福田

恆存先生十三回忌の墓參(第三十回連歌の會 一月一日) 大磯・國よし (○)三名(○)七名(○)一名

二月五日(日) 合評會(あらたま第六十號 紀元節) 六名

三月五日(日) 研究會(昭和天皇の教科書教育救語 鐵道唱歌第四集) 四名

四月九日(日) 研究會(玉くしげ秘本玉くしげ 鐵道唱歌第四集) (○)あらたま刊行三十周年記念物故諸先生慰靈祭並に物故諸先生を偲ぶ會 (○)五名(○)二名

四月二十三日(日) 芭蕉行脚第一步(尙藏館展、湯島聖堂、西新

井大師(芭蕉句碑) 炎天寺(一茶句碑) 他) 六名

五月七日(日) 研究會(日晷硯 鐵道唱歌第四集) (○)昆陽神社 參拜 (○)四名(○)二名

五月二十三日(日) 古文書拜見の會(法住寺、後白河院御陵、京都國立博物館、豐國神社、古文書拜見(角田文衛先生邸)) 四名

六月四日(日) 研究會(日本水士考・水士解辯増補華夷通商考 鐵道唱歌第四集) (○)大名を語る夕第三夜(別席・黒潮) (○)四名(○)一名(○)兩陛下のタイ、シンガポール行幸啓の平安を祈念して國歌を齊唱す。

七月二日(日) 合評會(あらたま第六十一號 鐵道唱歌第四集)

七月十五日(土) 芭蕉行脚第二步(尙藏館展、みたままつり參拜 日本橋(芭蕉句碑、寶井其角宅蹟)、上野(芭蕉句碑、二基)) 四名

九月三日(日) 研究會(政談 鐵道唱歌第四集) 七名

十月一日(日) 例會甲(福田恆存を語る夕第八夜) 黒潮・六名

十月二十八日(日) 例會乙・研究會(木村兼葎堂のサロン 鐵道唱歌第四集) (○)あらたま刊行三十周年記念懇親會の準備會 六名(○)地久節奉祝の國歌を齊唱す。○會報に掲載の同胞各位に訴へる・續の五を朗讀す。

十一月三日(金・祝) あらたま刊行三十周年記念懇親會(國歌齊唱、活動報告、實踐報告、福田恆存講演並に中村吉右衛門古事記朗讀の音聲披露、記念品贈呈・宮坂康司氏、談話、唱歌明治

節) 芝彌生會館 十八名(郡順史、落合夏樹、土田龍太郎諸氏)

十一月十九日(日) 研究会(柳子新論 鐵道唱歌第四集) 五名

十二月十日(日) 研究会(塵劫記 天長節) ①大名を語る夕第

四夜(別席・黒潮) 七名 ②天長節奉祝の國歌を齊唱す。

平成十九年(第三十二年)

年間主題其の一・歐米體驗記 其の二・萬葉集輪讀其の七 其の

三・荒魂之會回顧四 會報・第百二十六號(二月刊、卷頭に「平

成十九年奉祝・主權恢復五十五周年(四月二十八日) 昭和の日施

行(四月二十九日) 施行」の文言を記す。第百二十七號(四月刊、

同胞各位に訴へる續の六・教へられるべき事が教へられてゐない

明治天皇聖蹟の史蹟指定解除の撤回を望む(別刷五百五十部)を

掲載す。第百二十八號(七月刊、調査・全國十二日刊紙に於る

平成十九年歌會始御儀の記事の實態竝に第八十六回昭憲皇太后基

金收益配分先一覽を掲載す。第百二十九號(十月刊) 會報別號・

廻燈籠其の三(十二月刊) あらたま・第六十三號第六十四號 別

冊あらたま其の十・掌篇古典讀本瑞穂の國の言葉盡し(四月刊、

A五判二十八頁 五百部 題字・清水潤子)

一月十三日(土) 新年會(武藏野御陵多摩御陵參拜他の散策 ①

第三十一回連歌の會 一月一日) 殿ヶ谷戸庭園紅葉亭 ①⑦七

名 ③三名 ④二名

二月四日(日) 合評會(あらたま第六十二號 紀元節) ①福田

恆存を語る夕第九夜(別席・黒潮) ①⑤五名

三月四日(日) 研究会(書物 パーゼルより 鐵道唱歌第五集) 五名

三月二十五日(日) 沼津散策(主權恢復五十五周年竝に昭和の日

施行奉祝・沼津御用邸記念公園、若山牧水記念館他) 五名(田

口義昌氏他) ①終了後、大磯の福田恆存先生墓所に詣で、福田

恆存全集全八卷再讀終了の墓前の報告をす。

四月八日(日) 研究会(米歐回覽實記一 鐵道唱歌第五集) ①

瑞穂の國の言葉盡し刊行會(別席・黒潮) ①⑤五名 ①一名 ②昭

和の日(四月二十九日) 奉祝の國歌齊唱をす。 ②同胞各位に訴

へる・續の六の朗讀をす。

四月二十一日(土) 皇居(尙藏館展他) 靖國神社、乃木神社巡

拜 ③主權恢復五十五周年記念國民大會(三瀨修學院主催 乃木

神社尙武館) 三名

五月十三日(日) 研究会(戰後歐米見聞錄 鐵道唱歌第五集) 五

名 ④兩陛下のスウェーデン初め歐洲五箇國行幸啓の平安を祈

念して國歌を齊唱す。

六月三日(日) 研究会(新編プロヴァンス隨筆 鐵道唱歌第五集) 五名

七月一日(日) 合評會(あらたま第六十三號 鐵道唱歌第五集) ①

②大名を語る夕第五夜(別席・夢庵) ①④四名 ①一名

八月二十五日(土) 波の伊八の故地巡訪(上總一宮玉前神社他) 五名

九月二日(日) 研究会(スターリン獄の日本人 鐵道唱歌第五集) 五名

九月十五日(土) 芭蕉行脚第三步(素盞雄神社(奥の細道首途の

碑) 明治天皇行幸所對鷗莊蹟他) 七名(土田龍太郎氏他)

十月十四日(日) 研究会(ヨーロッパの旅 鐵道唱歌第五集) ①

②故佐藤哲夫先生を偲ぶ會(別席・黒潮) 四名 ③地久節奉祝の

國歌を齊唱す。

十一月十八日(日) 研究会(歐洲の四季 明治節) ①校正會六名

十二月九日(日) 研究会(テムズとともに 天長節) ①故佐藤哲夫

先生御遺宅弔問 ①⑤五名 ①一名 ②天長節奉祝の國歌を齊唱す。

荒魂之會三十二年から三十六年迄の來歴(一)平成二十三年四月
平成二十年(第三十四年)

年間主題其の一・近代の隨筆を讀む 其の二・萬葉集論讀其の八
其の三・日本書紀論讀其の一 會報・第百三十號(二月刊、卷頭
に「平成二十年・奉祝御即位以來二十年、源氏物語寛弘五年以來
千周年」の文言を記す。) 第百三十一號(四月刊、同胞各位に訴
へる續の七・知らされるべき事が知らされてゐない一再び同胞感
の涵養に關する提言(別刷五百部)を掲載す。) 百三十二號(七
月刊、調査・全國十二日刊紙に於る平成二十年歌會始御儀の記事
の實態竝に第八十七回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。)
第百三十三號(十月刊、紙碑其の六・石井勳、富士信夫、村尾次
郎、多田顯、佐藤哲夫五先生の追悼記を掲載す。) 會報別號・廻
燈籠其の四(十二月刊) あらたま・第六十五號第六十六號 荒魂
之會名簿(七月刊)

一月十二日(土)新年會(○芭蕉行脚第四步(報恩寺他) 第三十二回
連歌の會 一月一日) 向島百花園(○九名(遠山和夫氏他) 二名
二月三日(日) 合評會(あらたま第六十四號 紀元節) 福田
恆存を語る夕第十夜(別席・黑潮) 四名
三月二日(日) 研究會(一國の首都 春の小川) 故宇野精一
先生を偲ぶ會 (別席・黑潮) 五名
三月三十日(日) 故落合欽吾先生十三回忌、故宇野精一先生當年
忌の御遺邸弔問 二名
四月十三日(日) 研究會(排簾小船・石上私淑言 待ちばうけ)
七名(中澤伸弘氏他) 同胞各位に訴へる・續の七を朗讀す。
五月六日(火・振替休日) 京都散策(三條大橋から山科迄、京都
文化博物館(源氏物語千年紀展)) 七名(井上雅夫氏他)
五月十一日(日) 研究會(泣菫隨筆 臘月夜) 四名
六月一日(日) 研究會(鏑木清方隨筆集 一寸法師) 五名
七月六日(日) 合評會(あらたま第六十五號 我は海の子) 故
角田文衛先生を偲ぶ會 (別席・黑潮) 五名

八月二十三日(土) 第三回散策(○皇居東御苑(尙藏館展拜見)
濱離宮庭園(○東京灣納涼船) 八名(宮原サワ刀自他) 二名
九月七日(日) 研究會(寺田寅彦隨筆集 案山子) 五名
十月十九日(日) 研究會(漱石の思ひ出 鷗外の思ひ出 埴生
の宿) 大名を語る夕第六夜(終了) (別席・黑潮) 五名 地
久節奉祝の國歌を齊唱す。
十一月十六日(日) 研究會(斷腸亭日乘 明治節) 四名
十二月十四日(日) 川崎市稱名寺(四十七士像拜見) 研究會
(谷崎順一郎全集第二十卷 天長節) 物故諸先生を偲ぶ夕(別
席・黑潮) 三名(○六名) 天長節奉祝の國歌を齊唱す。
十二月二十三日(火・祝) 平成二十年奉祝荒魂之會行事(○天長節
參賀、靖國神社、千鳥ヶ淵墓苑巡拜(淺草演藝場) 三名) 一名
平成二十一年(第三十五年)

年間主題其の一・自傳、書簡、見聞記 其の二・萬葉集論讀其の
九 其の三・日本書紀論讀其の二 其の四・江戸生活事典論讀其
の一 會報・第百三十四號(二月刊、宇野精一周忌追悼特輯號)
第百三十五號(四月刊、卷頭に「奉祝・御大婚五十周年・四月十
日」の文言を記す。) 第百三十六號(七月刊、同胞各位に訴へる
續の八・御の字は御の字の儘に常用漢字表は撤廢の秋に至つて
ゐる(別刷五百部) 竝に第八十八回昭憲皇太后基金收益配分先一
覽を掲載す。) 第百三十七號(十月刊、角田文衛一周忌追悼特輯
號) 會報別號・廻燈籠其の五(十二月刊) あらたま・第六十七
號第六十八號

一月十一日(日) 新年會(○東海道行脚第五歩(三島宿から沼津
宿迄) 第三十三回連歌の會 一月一日) 若山牧水記念館 〇
九名(田口義昌氏、市川靜夫氏他) 一名(土田龍太郎氏)
二月二十二日(日) 合評會(あらたま第六十六號 紀元節) 〇
福田恆存を語る夕第十一夜(別席・夢庵) 五名
三月十五日(日) 研究會(北棧聞略 さくら) 五名
三月二十二日(日) 御大婚五十周年奉祝諸社巡拜(明治神宮、東

郷神社、乃木神社、皇居東御苑、靖國神社、護國寺（故宇野精一先生一周忌參拜）四名

四月五日（日）研究会（東海道中膝栗毛 荒城の月）七名（郡順史、田口義昌兩氏他）◎御大婚五十周年（四月十日）を奉祝して國歌を齊唱し、以後四月の定例にす。

五月十日（日）研究会（芭蕉書簡集 鎌倉）五名

五月三十一日（日）第二回散策・名園逍遥其の一（東御苑他）八名

六月十四日（日）研究会（仙境異聞勝五郎再生記聞 夏は來ぬ）六名

七月五日（日）◎合評會（あらたま第六十七號 濱邊の歌）◎紫式部を語る夕第一夜（別席・夢庵）◎五名◎一名（土田龍太郎氏）

あらたま 第二十一回以後詠草 連歌の會

◇第三十一回から第三十五回迄◇

平成二十三年四月

第三十一回 平成十九年一月十三日（土）

會場 殿ヶ谷戸庭園紅葉亭 出席者數九

句數 十八

初春や先の帝を偲びけり（中澤）

あけぼのすぎを仰ぐ瞳は

この後の時の移ろひ氣にかけず

大臣はまたも外國にあり

空冴えてまぢかに見ゆる窗の月

螢の川に宴せまりて

をみなありみたりは既に去ににけり

風吹きやみて更科の山

園めぐりあまたの牡丹に足を止め

茶店尋ぬる還曆の友

夢うつつ蓬萊山の一里塚

指をいたはる古稀の手習ひ

戀路ふむ年を忘れよ御鷹道

八月二十三日（日）故樋口清之先生十三回忌墓參（蒙徳寺他）三名

九月六日（日）研究会（折たく柴の記 水師管の會見）五名

十月十八日（日）研究会（福翁自傳 箱根八里）五名◎地久節奉祝の國歌を齊唱す。

十月二十五日（日）◎第三回散策・東海道行脚第六歩（平塚宿から大磯宿迄）◎故福田恆存先生十六回忌墓參（妙大寺）◎◎五名

◎三名（小林きく江刀自、中村やよひ刀自他）

十一月十五日（日）研究会（吉田松陰書簡集 明治節）五名

十二月十三日（日）研究会（幕末維新懷古談 天長節）五名

◎天長節奉祝の國歌を齊唱す。

大根求めて妻と親しむ

故き友新たに迎へ日も暮れぬ

連歌の會もみそまりひとつ

かなづかひ元に返るを願ひつつ

よはひを知らぬ常若の國

第三十二回 平成二十年一月十二日（土）

會場 向島百花園 出席者數十一 句數十八

海原を昇る初日に禱るかな（遠山）

吾の思ひにたてるさざなみ

人去りてただのこれるは櫻貝

別れを惜しむ下總の人

月待てば雨の社にいこふ猫

千歳となりぬ品定め夜

紫のゆかりも消えし武蔵野に

布袋様にてござさうらふや

初春に花一輪をそなへたり

たれをうらなふ戀のみくじは

包丁のさばき床しき俎に

夕餉に惑ふ家刀自の夢

古池の句碑何ゆゑここに建つ

鶯替神事の定めのままに

逢ふ事の願ひを結ぶ柳かな

をみなはるはずや七草の籠

春日野や山の端あかき月出でて

今宵の文は誰の窗邊に

第三十三回 平成二十二年二月十一日（日）

會場 若山牧水記念館 出席者數 十

句數 十八

松風は白鳥のせて大瀬崎へ（田口）

春の日うらら歩む東路

八時發こだまの窗に富士浮かび

空の青さよ彩の如し

棕櫚一里の塚にすくと立つ

面影しのぶ廣重の月

夏の川堰より落つる水いづこ

一筆書きの齡の箱は

うばたまの實を隠したる檜扇よ

詣づる日數は平作地藏

丑歳に何を願ふや二人連れ

おとども語るあだな睦言

冬の日や山里^{やま}に猫丸く

風にそよぐや柿のすだれは

やはらかき光満ちたり黄瀬川に

わらべ歌聞くをみな子の聲

鴨群れて祝の年に集ひたる

枝越しに見る十六夜の月

第三十四回 平成二十二年一月十日(日)

会場 舊堀田邸 出席者數十三 句數十八

あかねさす光あふるる春の野は(田中)

君をしたひて黒髪流る

その上は獅子舞踊る人の群

幸せ願ふ七福巡り

初月の空の青さに梅ふふむ

屠蘇を望むや振袖の花

川の邊の柳の下に佇みて

地藏詣に指を折りつつ

花の里病む人救ひし聖あり

若人招く西に長崎

風わたる筑波の嶺を遠く見て

戀路の行方神のまにまに

めでたさや大吉引きて有頂天

社の猫も寅となるらむ

新しき年の初に集ひしは

いにしへびとのたふときを知る

月卯月姫路の城も模様替

治まれる世にあらたまのくわい

第三十五回 平成二十三年一月九日(日)

会場 鷗外莊 出席者數十 句數十八

山茶花の葉うら揺らしてめじろ来る(宮川)

千壽の空はおだやかにして

あまたある七福神に願かけて

茅の輪くぐりの足もふるへつ

屋形船波間にゆるる秋の月

はべるをみなは幻の人

俳諧師羽織をかたに御大盡

源氏の君もかくあればあれ

路地裏に紫紺野牡丹咲き初めし

供養うけたり高橋お傳

行く春を惜しむ心をともにして

あふみの人もあづまの人も

あれ富士やまことやまことひとりごと

東照宮の初夢のうた

初春の池に遊ぶやゆりかもめ

遊ぶわらべは人影も見ず

舞姫の館の宴に月昇る

三十五年の友の語り

あらたま連歌の會第三十一回から第三十

五回迄の出席者(計十七名)

五回・加藤征司、駒井鐵平、角山正之、根

岸清文、小澤泰裕(五) 四回・土田龍太郎、

田口義昌(二) 三回・遠山和夫、土谷まつ

江、田中芳恵、小林きく江(四) 二回・中

澤伸弘、宮川輝男、中村やよひ(三) 一回

・前川孝志、市川靜夫、前田哲男(三)

あらたま連歌の會全三十五回(昭和五十一年十二月から平成二十三年一月迄)の出席者一覽 計五十八名

三十五回・駒井鐵平(一) 三十四回・角山正之(一) 二十八回・根岸清文(一) 二十一回・前川孝志(一) 十六回・川畑賢一、大橋伊佐男、粉川宏(三) 十四回・小澤泰裕、加藤征司(二) 十三回・田口義昌(一) 十二回・平山寛司(一) 十一回・竹内孝彦、高崎一郎、市川靜夫(三) 十回・本間一誠(一) 九回・倉成(一) 八回・下坂

勝洋、三宅義藏、土田龍太郎(三) 七回・佐藤哲夫、平田光寛、千葉展正、伊東康夫(四) 六回・伊勢崎康幸、中澤伸弘、佐藤利幸、(三) 五回・佐藤亮策(一) 四回・清水明彦(一) 三回・松村洋史、高池勝彦、遠山和夫、土谷まつ江、田中芳恵、小林きく江(六) 二回・土屋秀宇、太田稔、岡村明人、宮川輝男、中村やよひ(五) 一回・下地正信、吉田道明、野島晴美、菊池孝子、石川隆一、鈴木由次、佐藤さつき、片岡正彦、富澤敏彦、荒井眞弓、平田清美、中村信一郎、中村敬司、中村實、笹目善一郎、齋藤景、小川榮太郎、佐竹義宣、前田哲男(十九)

荒魂之會三十二年から三十六年迄の來歴(三)平成二十三年七月
平成二十二年(第三十六年)

年間主題其の一・人間論を讀む 其の二・萬葉集輪讀其の十其
の三・日本書紀輪讀其の三 其の四・江戸生活事典輪讀其の二
會報・第百三十八號(二月刊、卷頭に「平成二十二年・教育敎語
渙發百二十周年・私の國語敎室刊行五十周年・三島由紀夫歿後四
十周年」の文言を記す。)第百三十九號(四月刊、調査・全國十
二日刊紙に於る平成二十二年歌會始御儀の記事の實態を掲載す。)
第百四十號(七月刊、同胞各位に訴へる續の九・國語といふ大河
を涸渇させる事勿れ―常用漢字表の廢止を望む(別刷五百五十部)
並に第八十九回昭憲皇太后基金收益配分先一覽を掲載す。)第百
四十一號(十月刊、紙碑其の七・白田甚五郎、名越二荒之助、鈴
木俊雄、新井寛、鈴木由次、宇野精一、萩野貞樹、角田文衛、佐
藤茂、井上順理、太田絢子十一先生の追悼記を掲載す。會報別號・
廻燈籠其の六(六月刊)あらたま・第六十九號第七十號(刊行三
十年記念號)荒魂之會名簿(七月刊)

一月十日(日)新年會(○幕末史蹟散策第一歩・佐倉)第三十四回
連歌の會 一月一日(舊堀田邸)○十二名(宮川輝男氏他)○一名
二月十四日(日)○合評會(あらたま第六十八號 紀元節)○福

田恆存を語る夕第十二夜(別席・黒潮) 五名
三月七日(日) 研究會(翁問答 早春賦) 五名

四月四日(日) 研究會(二宮翁夜話 櫻井の訣別) 五名○御大婚
五十一周年(四月十日) を奉祝して國歌を齊唱す。

五月二日(日) 研究會(文章讀本 一寸法師) 七名(土田龍太郎氏他
五月二十三日(日) 第二回散策・名園逍遙其の二(皇居東御苑、小石川
後樂園、小石川植物園) 十一名(田中芳恵刀自、土谷まつ江刀自他)

六月六日(日) 研究會(人生論風に 浦島太郎) 六名(前田哲男氏他)
七月四日(日) ○合評會(あらたま第六十九號 海) ○紫式部を
語る夕第二夜(別席・黒潮) 五名

九月十二日(日) ○鏡畫廣重の東海道五十三次鑑賞○研究會(風
土 元寇) 五名

十月十七日(日) ○研究會(人間であること 赤とんぼ) ○會報
に掲載の紙碑欄の輪讀 五名○地久節奉祝の國歌を齊唱す。

十月二十四日(日) ○甲州街道猿橋宿並に芭蕉行脚第五歩○故石
井勳先生七回忌墓參(烏澤墓地) ○(五名)竹内孝彦氏他 ○三名

十一月十四日(日) 研究會(手仕事の日本 明治節) 五名
十二月十二日(日) 研究會(忌み名の研究 天長節) 七名(中澤
伸弘氏、橋本眞吾氏他) ○天長節奉祝の國歌を齊唱す。

附・あらたま刊行三十年乃回顧（會報あらたまに掲載の記事の再録（平成十八年六月刊）の内容）

甲・あらたま刊三十年の回顧

豫告と實施と報告と—あらたま刊行三十周年略記（駒井鐵平）

◇平成十八年二月刊 第二百二十二號◇

天長の佳節に集ふ—あらたま刊行十周年記念懇親會

◇昭和六十一年七月刊 第四十四號◇

同人回顧・あらたまの十五年（十二篇）

◇平成三年二月刊 第六十二號◇

秋の日の午後の清談—あらたま刊行十五周年記念懇親會略記

◇平成四年二月刊 第六十六號◇

あらたま刊行二十周年摘記（駒井鐵平）

◇平成八年四月刊 第八十三號◇

同人座談會・回顧と展望と（七名）

◇平成十三年十月刊 第一百五號◇

夫々の縁—あらたま刊行二十五周年記念懇親會略記

◇平成十四年二月刊 第一百六號◇

乙・連歌の會三十回の回顧

連歌の會三十回の記（角山正之）

◇平成十八年四月刊 第二百二十三號◇

あらたま連歌の會十五回詠草（昭和五十一年から平成三年迄）

◇平成三年四月刊 第六十三號◇

あらたま連歌の會第十六回以後詠草（第二十五回迄）

◇平成十三年四月刊 第一百三號◇

あらたま連歌の會第二十六回以後詠草（第三十回迄）

◇平成十八年四月刊 第二百二十三號◇

◇あらたま刊行三十周年記念作物・B五判二十四頁◇
編修・駒井鐵平 製版印刷・角山正之 題字・加藤征司

◇編修後記◇

あらたま刊行三十五周年の記念の作物の一として、本年六月に作製した荒魂之會來歴・其の六とは別に、會報あらたまに掲載して來た荒魂之會の來歴と連歌の會の詠草とを併せて、書物から書物へ—荒魂之會諸會合の三十五年餘を編む。會報に掲載の荒魂之會の來歴は全會合の摘要を記載するものであるが、諸會合の中心となるものは毎月の讀書會である。先の荒魂之會來歴・其の六には、昭和五十年十月の例會開始以來、平成二十二年十二月迄の三十五年餘の歲月に於る課題の書物として、三百九點三百二十二冊（内、二十二點を再讀）参考、三點の數字を示してゐる。正しく書物から書物への歲月なのであつた。其の成果は年に二回の刊行のあらたま誌に示されてゐる筈であるが、果してどのやうな評價の下にあるのであらうか。今日の我が國に於て、讀むべき書物のみを求めて來たのであるが、其の營みが未だ見ぬ友を得てゐるのか否か、それは定かではないと言はれるのであらうか。昭和五十一年八月創刊のあらたま誌は刊行三十五年の第七十號を経て第七十一號に至り、書物への旅は三十七年目に這入つてゐる。果して何處迄續くのであらうか。

書物から書物へ—荒魂之會諸會合の三十五年餘

（あらたま刊行三十五周年記念作物 會員配布・二百二十部）
平成二十三年九月四日（日）刊 編修・發行 荒魂之會

（千葉市中央区葛城一丁目三番九號 駒井方）

（製作）記事・編修 駒井鐵平 製版・印刷 根岸清文